

東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト10
本郷キャンパスの弥生時代から古墳時代

発表資料

「本郷キャンパスの弥生時代から古墳時代」

日 時 2025年3月15日(土) 13:00~16:30

会 場 法文1号館113番教室(東京大学本郷キャンパス)

共 催 東京大学埋蔵文化財調査室・次世代人文学開発センター・考古学研究室

【進行予定】

13:00 開会

13:10 1:趣旨説明(山下)

13:20 2:東京大学医学部附属病院地区の古墳時代の遺跡(成瀬・堀内)

14:00 3:弥生式土器第1号と弥生町遺跡群形成の背景(篠原)

15:00~15:20 休憩・遺物見学

15:20 4:発掘調査からみえた古墳時代の本郷台(山下)

16:30 閉会

2. 東京大学医学部附属病院地区の古墳時代の遺跡

成瀬晃司 堀内秀樹

地形から観る弥生～古墳時代集落の分布

概期の集落が立地する本郷キャンパスは、ほぼ南北に伸びる本郷台の台頂部から東側緩斜面上に位置する。さらに根津谷に向かう数条の開析谷や三四郎池から北方へ伸びる流路とそれに向かう小支谷も加わり、特にキャンパス北半部の旧地形は複雑な様相を呈す。そのため大名屋敷から大学へ続く江戸時代以降の開発で、台地上の削平や斜面地の盛土、切土造成などが行われ、旧地形は大きく改変されたことがこれまでの調査で確認されている。明治10年にこの地に設立した東京大学は、校舎等建設のため小支谷を埋め立て平準化するなど多くの地形大改変を実施してきた。1図に示した等高線は、明治16年に参謀本部陸軍測量局が作成した五千分一東京図測量原図を対比させたもので、三四郎池北東端から北上する流路及びそれに向かう小支谷などは現在ではほぼ面影が観られない。そこでおおよその旧地形を反映している本等高線とこれまでの調査で確認された弥生～古墳時代の遺構分布から概期の景観を概観したい。

弥生時代中期（宮ノ台）

本期に帰属する遺構は87、345地点で確認された。87、345地点と中谷治宇二郎報告の有角石器出土推定地は、三四郎池から北上する流路に向かう東西方向の小支谷と三四郎池流路が屈曲して東南流に変化する現在の暗闇坂付近の支谷に囲まれた台地上に立地している様相が看取される（1図等高線緑色表記）。但し345地点では小支谷に向かう緩斜面上で1棟確認されたのみで集落の規模はそれほど大きくないと推定される。

弥生時代後期

本期に帰属する遺構は、現在国史跡「弥生二丁目遺跡」として指定され環濠2基が検出された向ヶ岡貝塚と方形周溝墓が検出されているが、竪穴建物など直接集落を構成する遺構は未確認である。30、61、94、297地点及び切通で遺構・遺物が確認された理学部3号館南遺跡、医学部附属病院113地点がある。向ヶ岡貝塚で検出された環濠は北西方向から弧を描いて南西方向に伸びており、それを等高線（1図赤色表記）と対比させた推定集落範

囲が1図の破線エリアである。方形周溝墓が検出された4地点は、集落推定範囲の南西側で標高がやや低い区域に位置する（30、297は同一遺構と考えられる）。断片的な状況ではあるが、台地縁辺の微高地に集落を支谷に近く集落地よりやや標高が低い南西部に墓域を形成したことが推測される。理学部3号館南遺跡は報告では前野町式期と評価されているが、7地点と合わせ弥生終末期から古墳初頭にかけて集落推移を考える必要がある。また113地点は既述した集落域より約500m南東に位置し、古墳時代前期集落に近接する。本遺構の評価は今後の近接地未報告地点の分析を待ちたい。

古墳時代前期

本期に帰属する遺構は、浅野地区の7地点以外は医学部附属病院地区東部に集中する（19、21、23、25、48、74、97-1、97-2、101、113、125-1、148、277地点）竪穴建物のほか埋葬施設と考えられる隅丸方形周溝遺構が確認されている。周溝群は概ね101、125-1、148地点で確認され竪穴建物群の北から西側に展開している。両遺構の重複事例は148地点で1件認められるが、周溝と考えられる溝が弓状を呈し西側遺構群と形状が異なる点は今後の検討課題である。

古墳時代中期

本期に帰属する遺構は医学部附属病院地区23、25、74、97-2地点と前期遺構集中域の南東域に展開する。分布域の中心は74にあり、それを取り巻くように散漫な分布が認められ、前期分布域から台地縁辺部への変化が認められる。

古墳時代後期

本期に帰属する遺構は、医学部附属病院地区4-1、19、23、113地点で認められ、前段階までとは異なり散漫な様相を呈す。分布域周辺では、4-1南東部から23北西部を通り48南側の等高線括れ部に伸びる埋積谷が確認されており、本期の竪穴建物はその北側台地上に分布している。

【参考文献】

鮫島（篠原）和大 1994「壺形土器（重文指定）」『東アジアの

- 形態世界』東京大学総合研究資料館
 篠原和大 2009『Ⅷ 弥生町遺跡の考古学的評価』『東京大学
 本郷構内の遺跡 浅野地区Ⅰ』
 設楽博己 2011「弥生式土器の発見」『弥生誌－向岡記碑をめぐって－』東京大学総合研究博物館
 東京大学文学部考古学研究室 1979『向ヶ岡貝塚－東京大学構
 内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告書』
 中谷治宇二郎 1924「東大人類学教室倉庫跡より発見されし二
 個の炆器に就て」『人類学雑誌』39巻7-9号
 平石冬馬 2021「看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点の古
 墳時代遺跡調査成果と今後の展望」『医学部附属病院地点
 看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等
 宿舎3号棟地点(1)』
 山下優介 2021「東京大学本郷構内の遺跡 東京都下水道地点
 発掘調査報告 第2節 中谷治宇二郎報告の石斧出土地点
 の検討」『東京大学構内遺跡調査研究年報』14
 山下優介 2024「本郷台地における古墳時代の集落変遷」『医
 学部附属病院看護職員等宿舎5号棟 看護職員等宿舎3号
 棟地点(1)』

○本報告・概報掲載調査室刊行物

- 4-1：1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
 7：『東京大学構内遺跡調査研究年報』7
 19、21：2021『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地
 点看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員
 等宿舎3号棟地点(1)』
 25：2025『東京大学構内遺跡調査研究年報』17
 30、61：2009『東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区Ⅰ』
 48、74：2024『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院看
 護職員等宿舎5号棟地点・看護職員等宿舎3号棟地点(2)』
 87、277、297：2021『東京大学構内遺跡調査研究年報』14
 97：2022『東京大学構内遺跡調査研究年報』15
 101：2012『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
 113、125-1、148：2017『東京大学構内遺跡調査研究年報』
 10
 345：未報告

看護職員等宿舎1号棟地点

調査の概要

医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟地点は、建設対象地746㎡を対象に、1993年8月4日～1994年1月17日にかけて調査を実施した。本地点は傾斜変換点に向かう台地上に位置し、極緩やかな傾斜を有している。江戸時代は富山藩邸内に位置し、藩邸初期段階の開発によっ

て標高の高い西側を中心にローム層まで削平されていた。

古墳時代の状況

竪穴建物7棟が確認された(2図)。このうち古墳時代後期に帰属するSI1004を除き、古墳時代前期に帰属する。検出されたほとんどの遺構が江戸時代の削平及び遺構の攪乱を受け、遺存状況は悪い。特にSI1003、SI1005、SI1007は壁溝と一部の床面が検出されたにすぎない。こうした中SI1001はローム層削平が浅い東側に位置し、偶然にも江戸時代以降の遺構攪乱もほぼ受けていなかったことで、良好な状況で遺存していた。そのため床面直上付近からは完形、半完形品など良好な一括廃棄資料を得ることができた(3～5図)。

【参考文献】

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021『東京大学本郷構内の遺跡
 医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地
 点・看護職員等宿舎3号棟地点(1)』

臨床試験棟地点

調査の概要

医学部附属病院臨床試験棟地点は、建設対象地400㎡を対象に、1994年1月18日～3月12日にかけて調査を実施したが、調査区西半は附属病院内の既存基幹下水管掘削坑攪乱のため実際の調査対象面積は5割弱である。江戸時代は富山藩邸内に位置し、藩邸初期段階の開発によってローム層まで削平されていた。

古墳時代の状況

竪穴建物5棟が確認された(6図)。検出されたほとんどの遺構が江戸時代の削平等を受け遺存状況は悪い。特にSI01は壁溝、柱穴、炬と極一部の床面が検出されたにすぎなかったが、1辺約7mを測る大形の建物である。調査区北側で重複するSI03～SI05は、SI03が最も新しくSI05が最も古い。SI04は1辺940cmを測る大形建物で、本地点周辺では最も大きい遺構の一つである。東壁付近に貯蔵穴と考えられる土坑が確認され、埴が2点出土した(7図14、15)。また炉東側より滑石製の勾玉が1点出土している(7図16)。

遺物は、SI01、SI02、SI04を図示した(7図)。

【参考文献】

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021『東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎3号棟地点(1)』

医学部附属病院看護職員等宿舎3号棟・5号棟地点

調査の概要

医学部附属病院看護職員等宿舎3号棟地点と同5号棟地点は、医学部附属病院の職員宿舎を建築する事前調査であり、両地点は3号棟地点の東側と5号棟地点の西側で隣接して位置している。発掘調査は、3号棟地点が1996～97年、5号棟地点が2008年に行い、調査面積は、それぞれ525㎡、550㎡である。

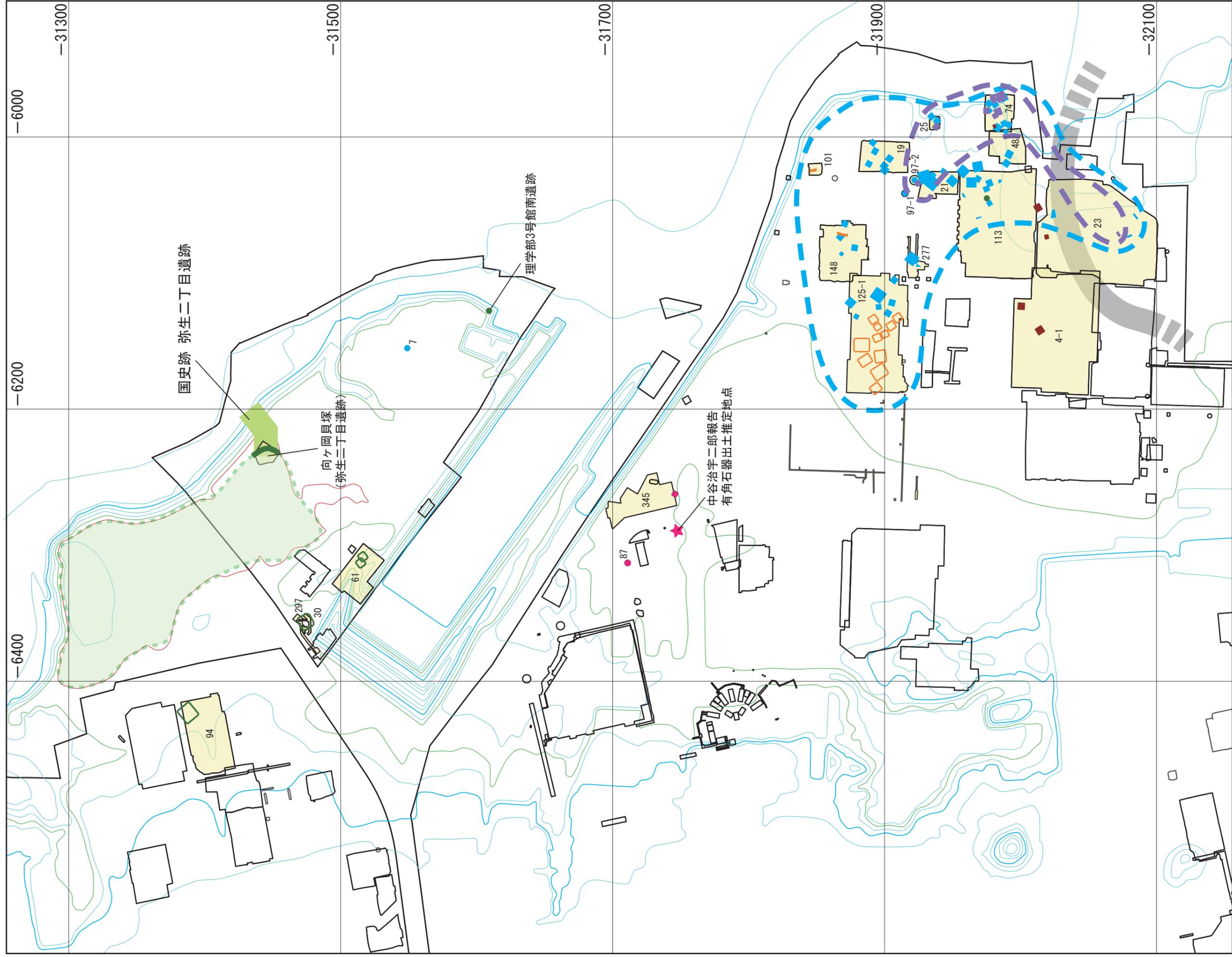
両地点の古墳時代の状況

両地点からは、竪穴建物16基、土坑3基、ピット67基、炉址1基確認された(8図)。このうち竪穴建物の時期は、不確定なものを含めて、弥生時代末～古墳時代前期に比定されるものが1基、古墳時代前期が5基(3号棟地点、5号棟地点SI236、SI242など)、古墳時代前～中期が1基、古墳時代中期が9基(5号棟地点SI201、SI212など)、古墳時代中期末～後期初頭が1基(SI203)であった。このうち両地点にまたがって確認された竪穴建物が2基あった。これら竪穴建物の年代差は、出土遺物の様相差に加えて遺構軸の変遷からも伺うことができる。

遺物は、前期SI236(9図)、SI242(10図)、中期SI201(11～15図)、中期末～後期初頭SI203(16図)を図示した。

【参考文献】

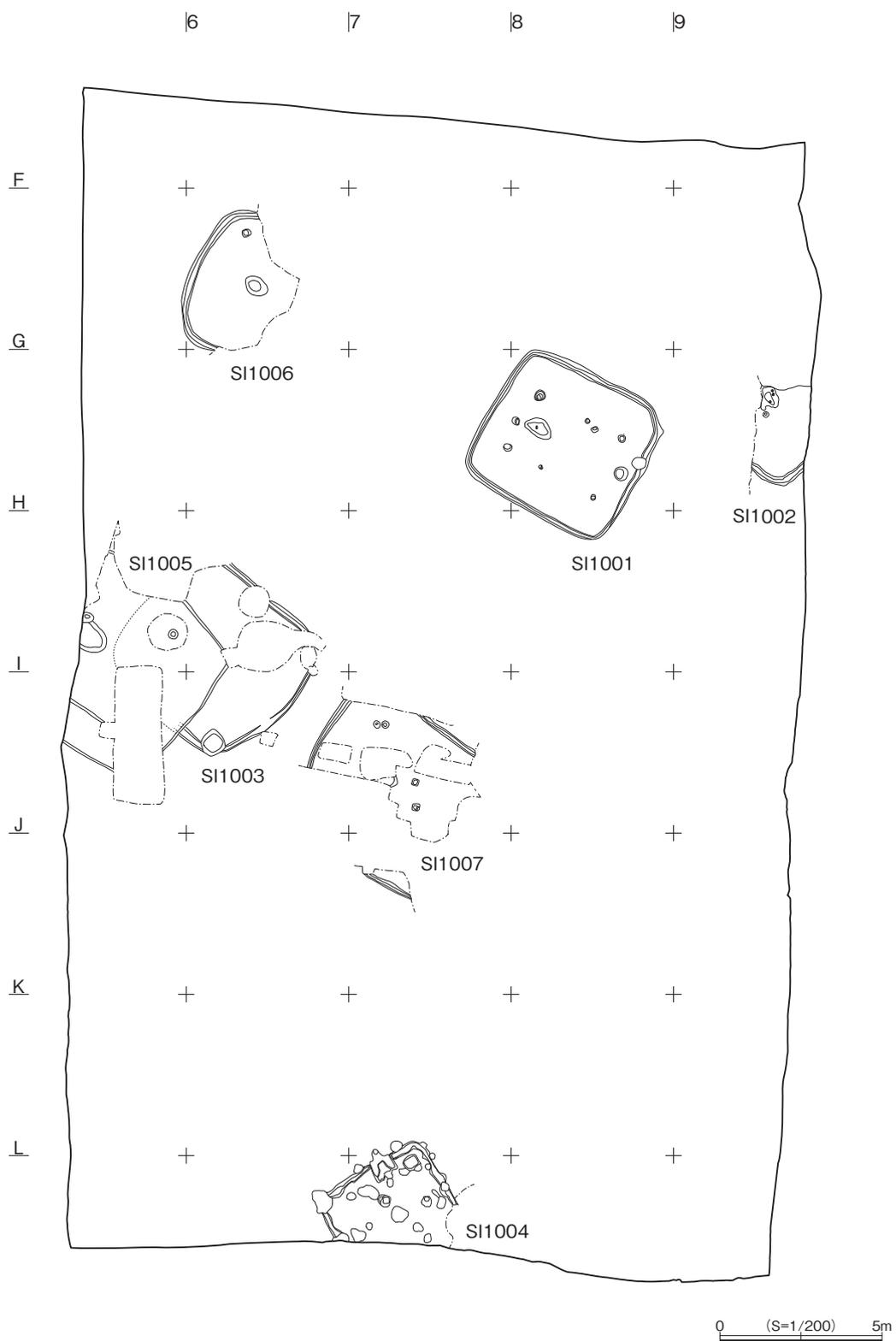
東京大学埋蔵文化財調査室 2024『東京大学本郷構内の遺跡
医学部附属病院看護職員等宿舎5号棟地点・看護職員等宿舎3号棟地点(2)』



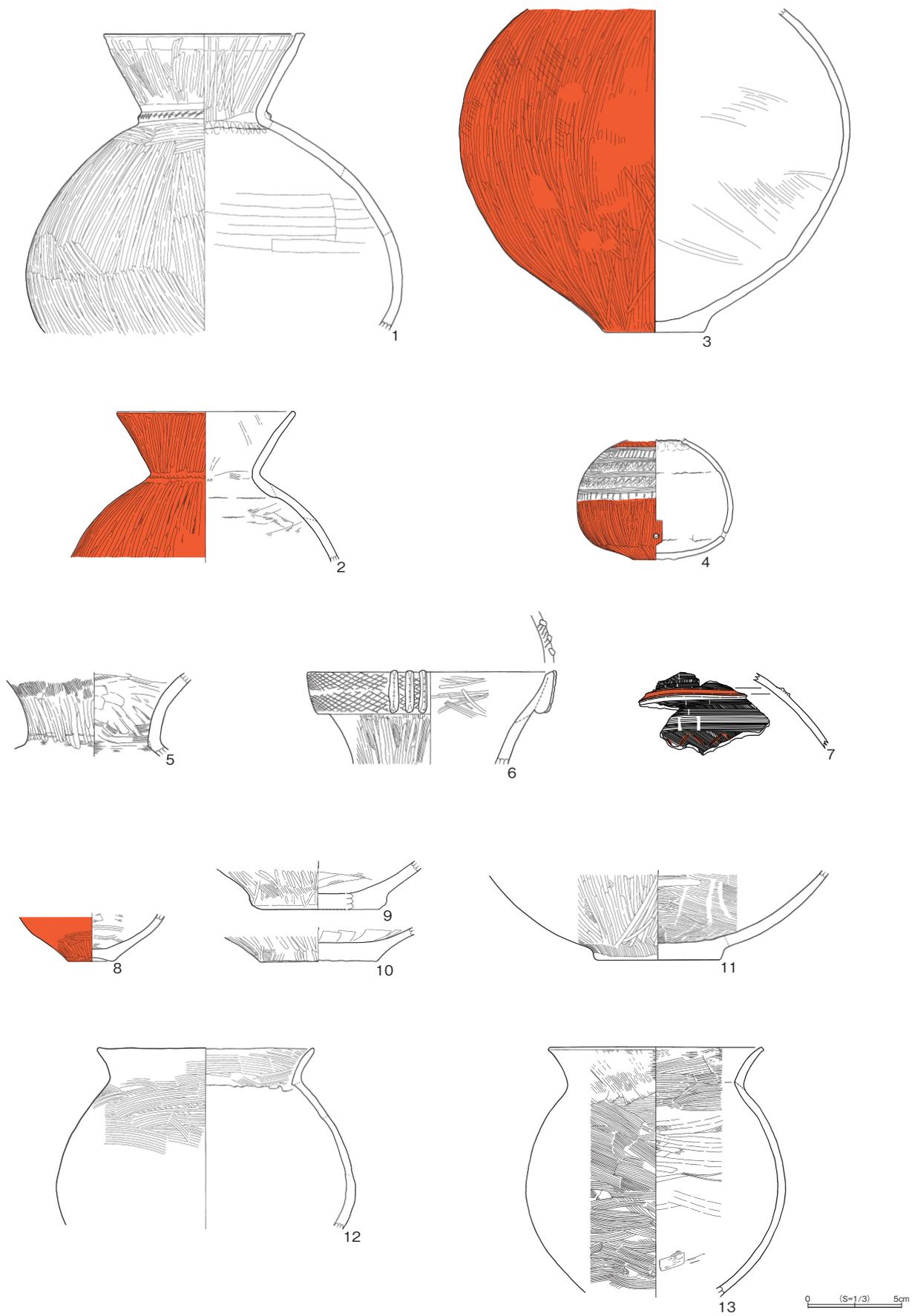
1図 本郷地区弥生・古墳時代遺構分布 (S=1/2500)

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 弥生時代 | □ 方形周溝墓(後期) | ■ 竪穴建物(後期) |
| | ■ 竪穴建物(中期) | ■ 竪穴建物(前期) |
| 古墳時代 | □ 周溝墓 | ■ 竪穴建物(後期) |
| | ■ 竪穴建物(中期) | |
- 4-1中央診療棟、7新タナム棟、19看護職員等宿舎1号棟、21臨床試験棟、23入院棟A、25看護師宿舎ゴミ置き場、30工学部風工学実験室支障ケール、48看護職員等宿舎3号棟、61武田先端地ビル、74看護職員等宿舎5号棟、87東京都下水道、97-1基幹整備(流域⑧排水)A区、97-2基幹整備(流域⑧排水)B区、101トナリド・マクドナルドハウス、113入院棟II期、125-1ク)ニカル)カーセンターA棟I期、148国際科学イノベーションセンター統合棟、277基幹整備 共同溝、297基幹-環境整備(言問通り横断管路)II期、345D&I-B棟

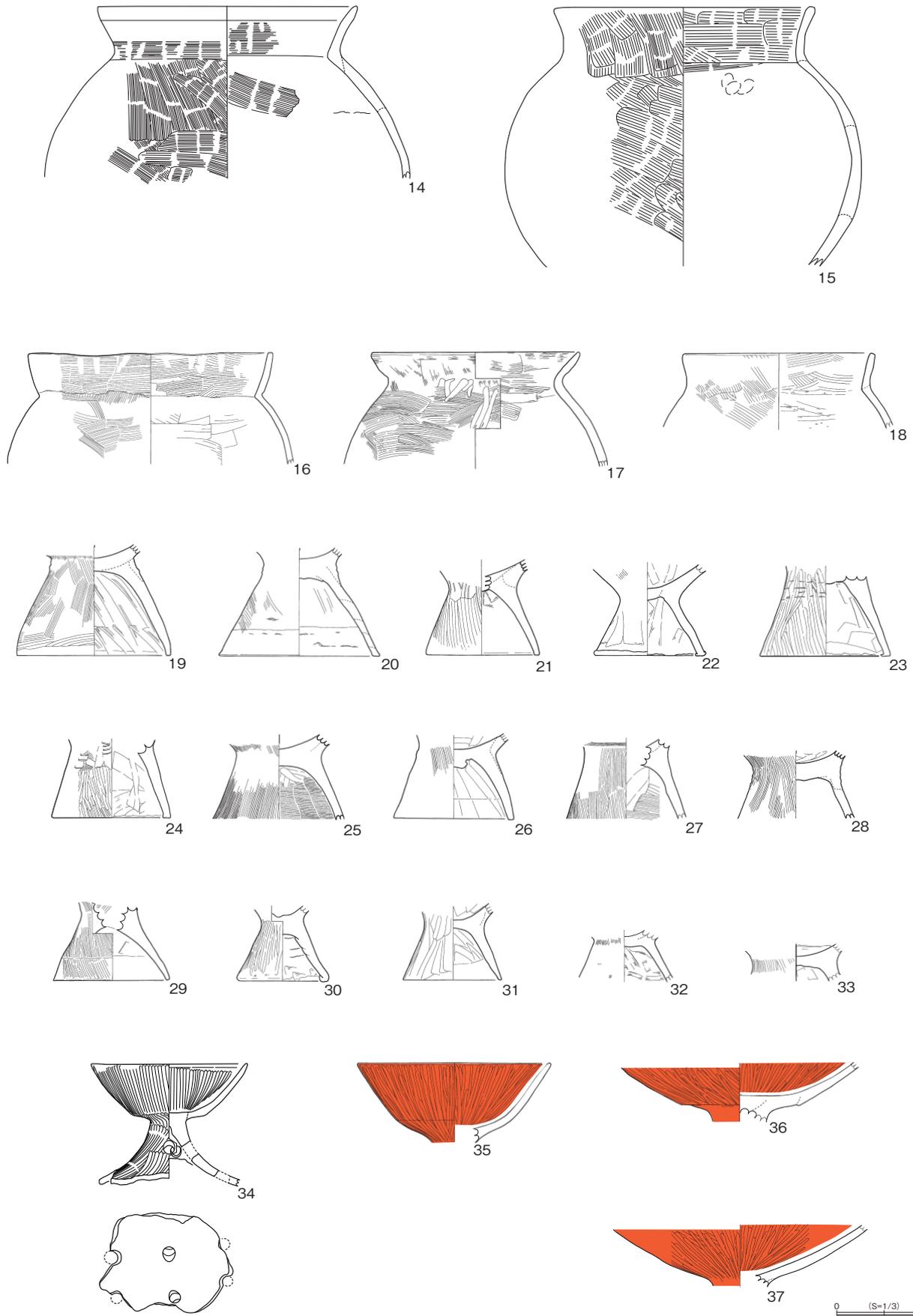
世界測地系



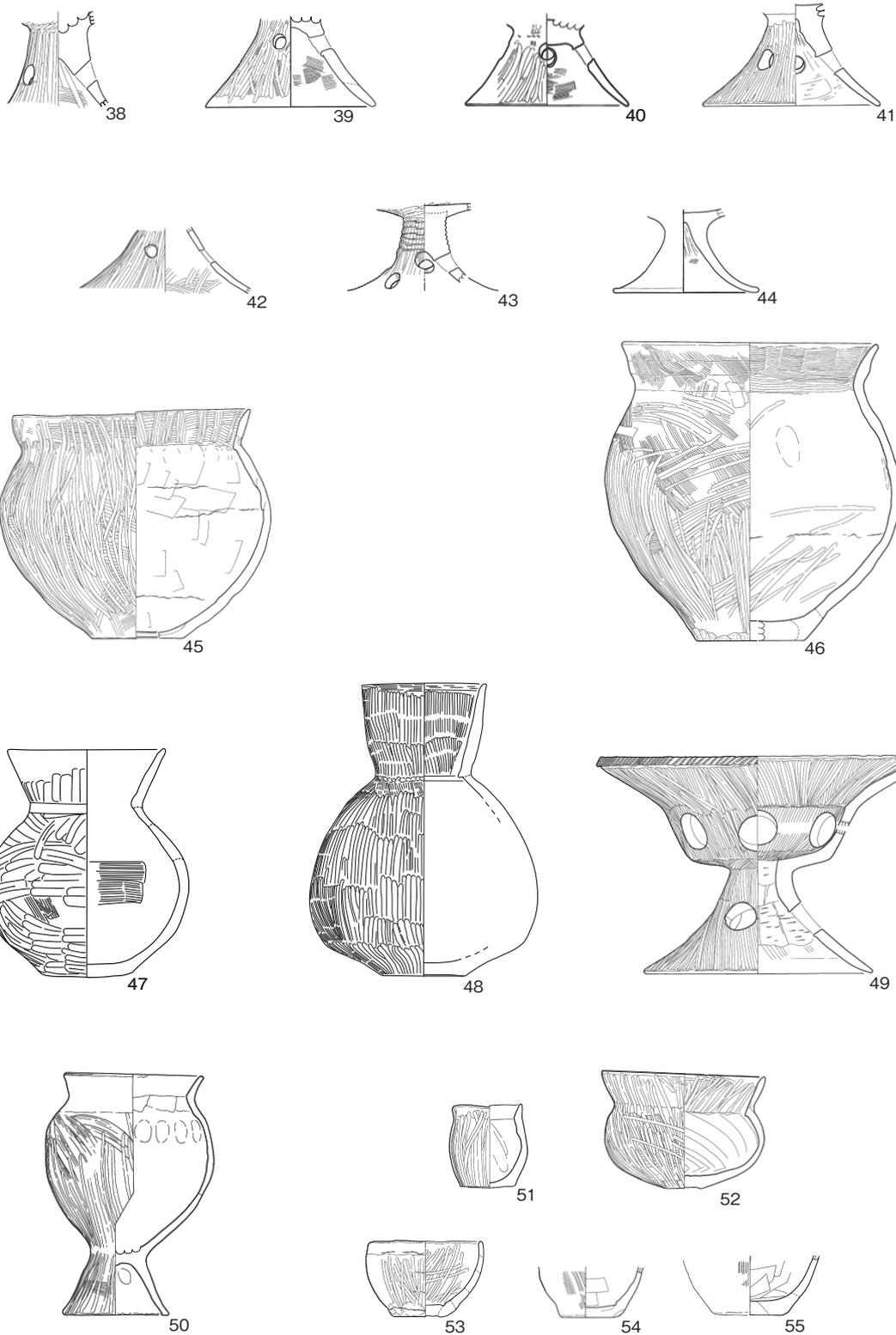
2 図 看護職員等宿舍 1 号棟地点 古墳時代遺構分布図



3図 看護職員等宿舎 1号棟地点 SI1001 出土遺物 (1)



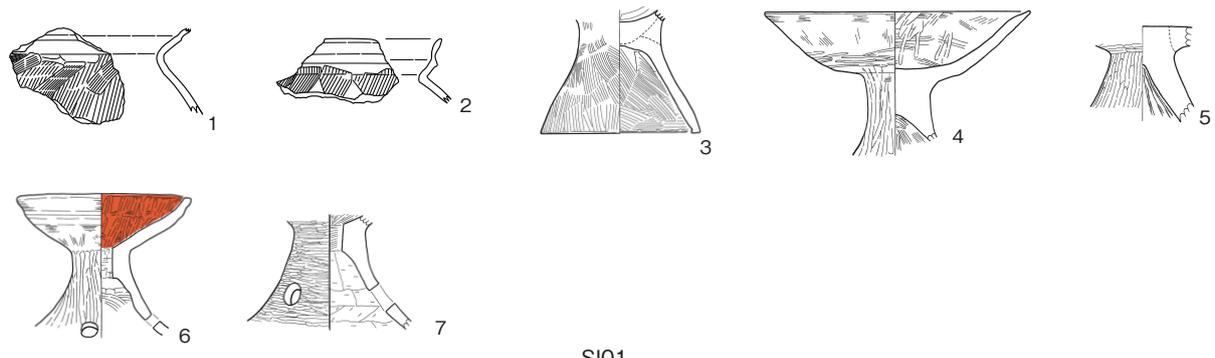
4 図 看護職員等宿舍 1 号棟地点 SI1001 出土遺物 (2)



5 図 看護職員等宿舍 1 号棟地点 SI1001 出土遺物 (3)



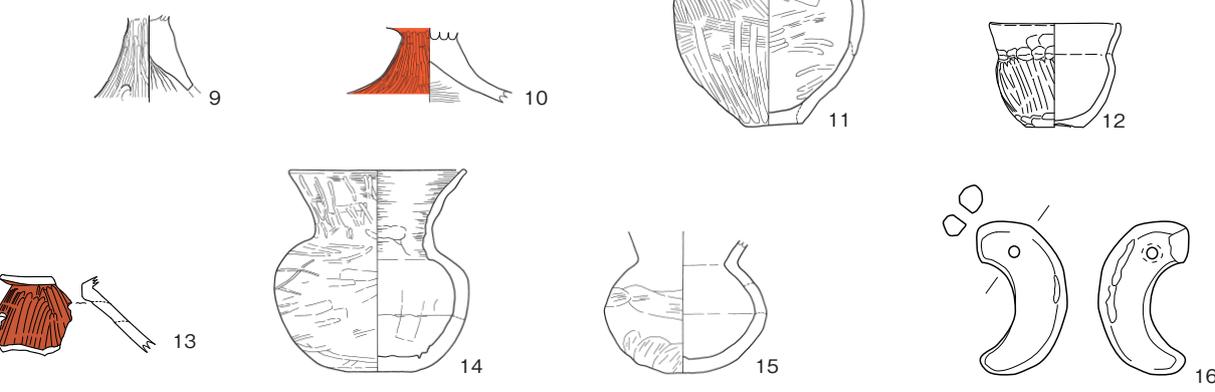
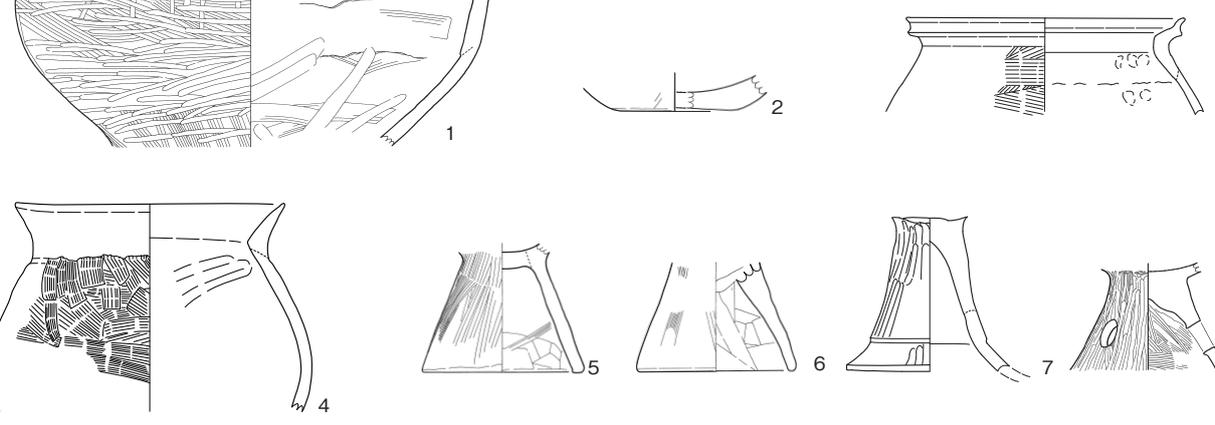
6 図 臨床試験棟地点 古墳時代遺構分布図



SI01

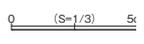


SI02

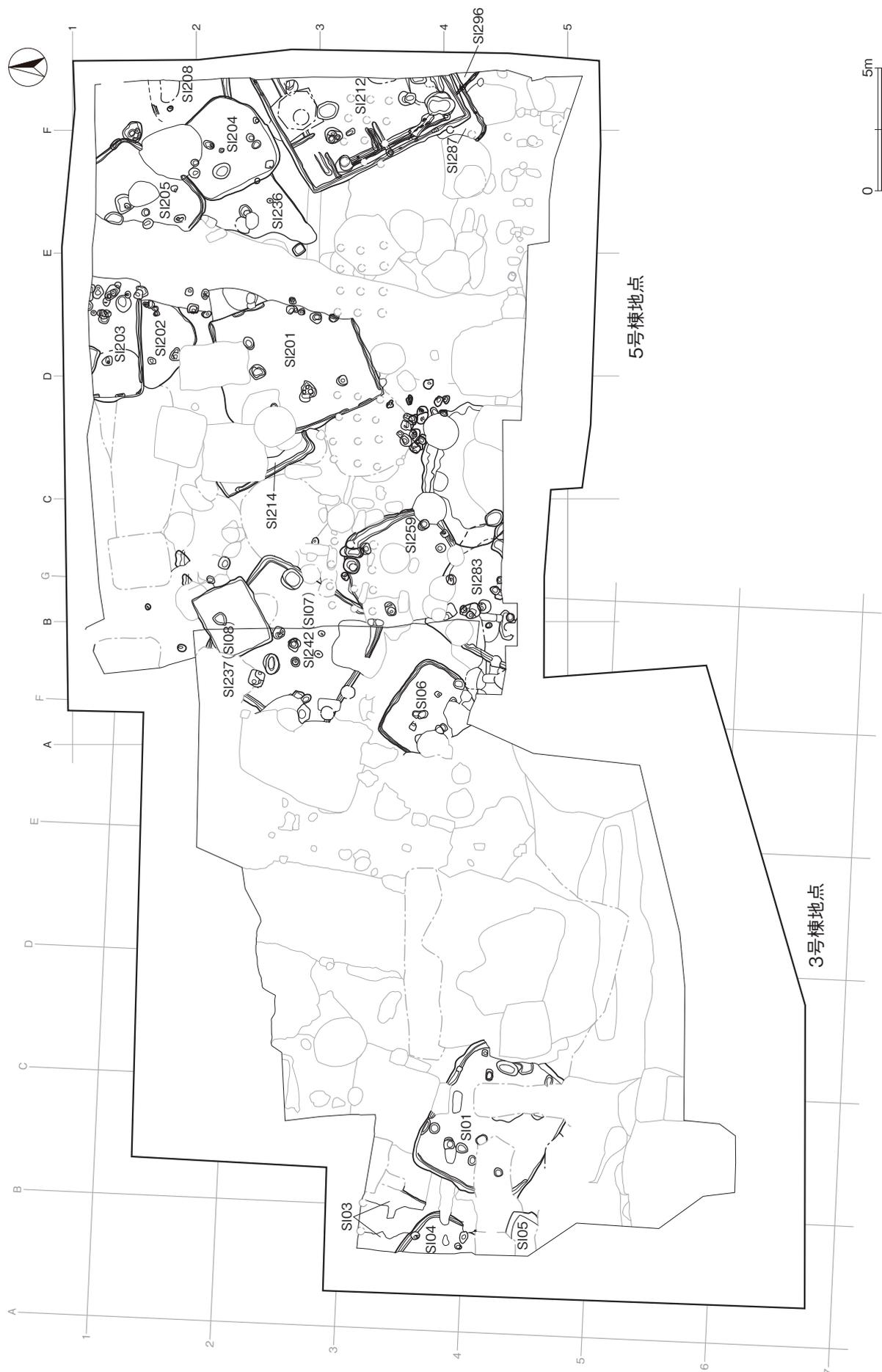


SI04

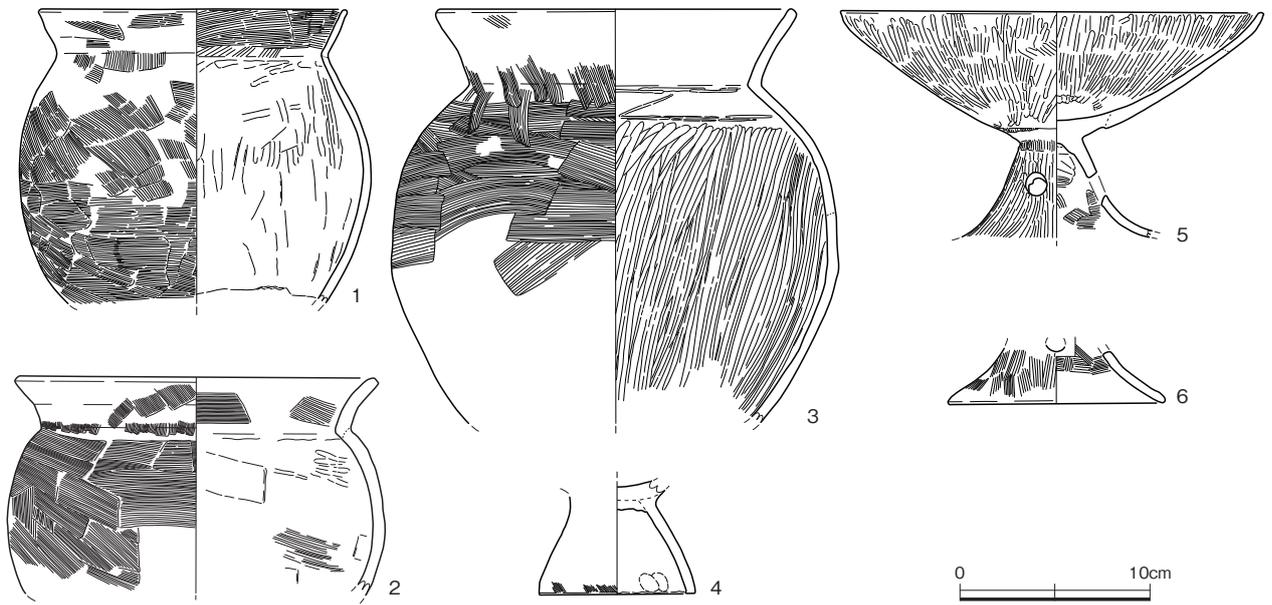
(1/1)



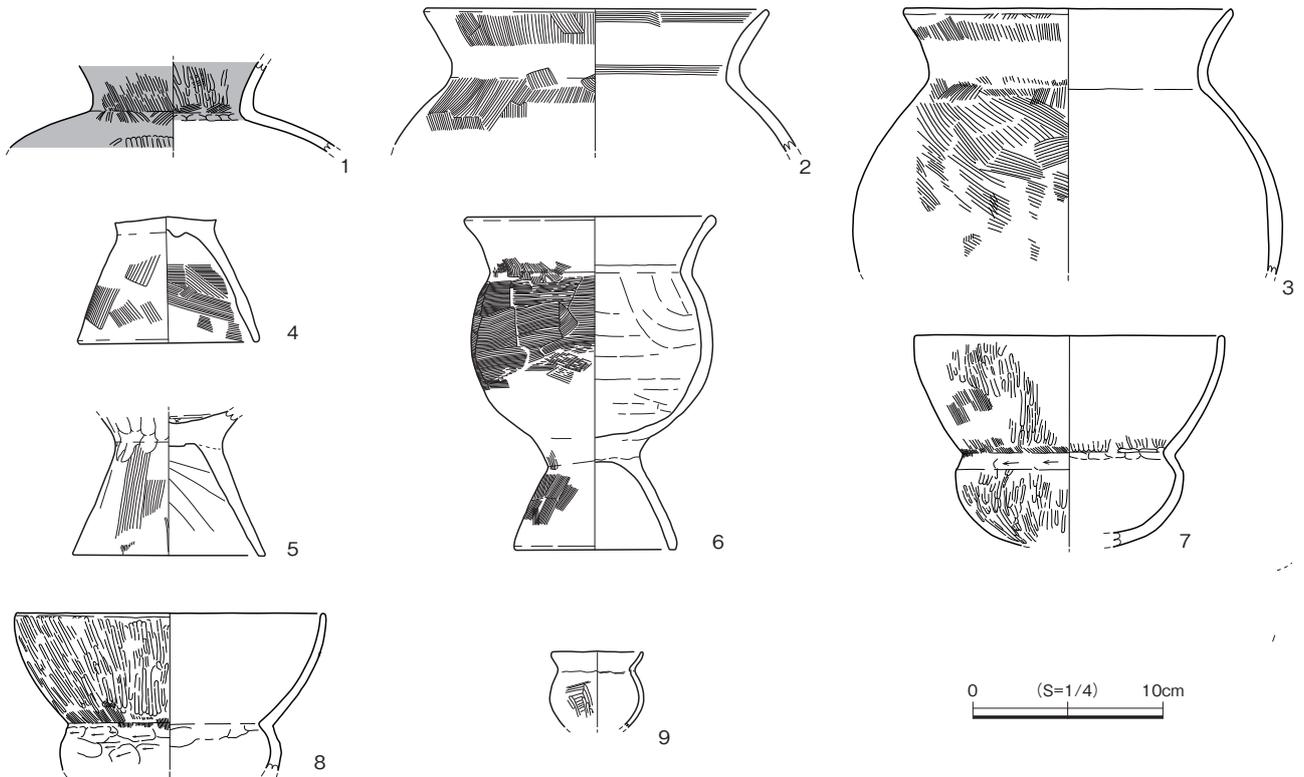
7 図 臨床試験棟地点 SI01、SI02、SI04 出土遺物



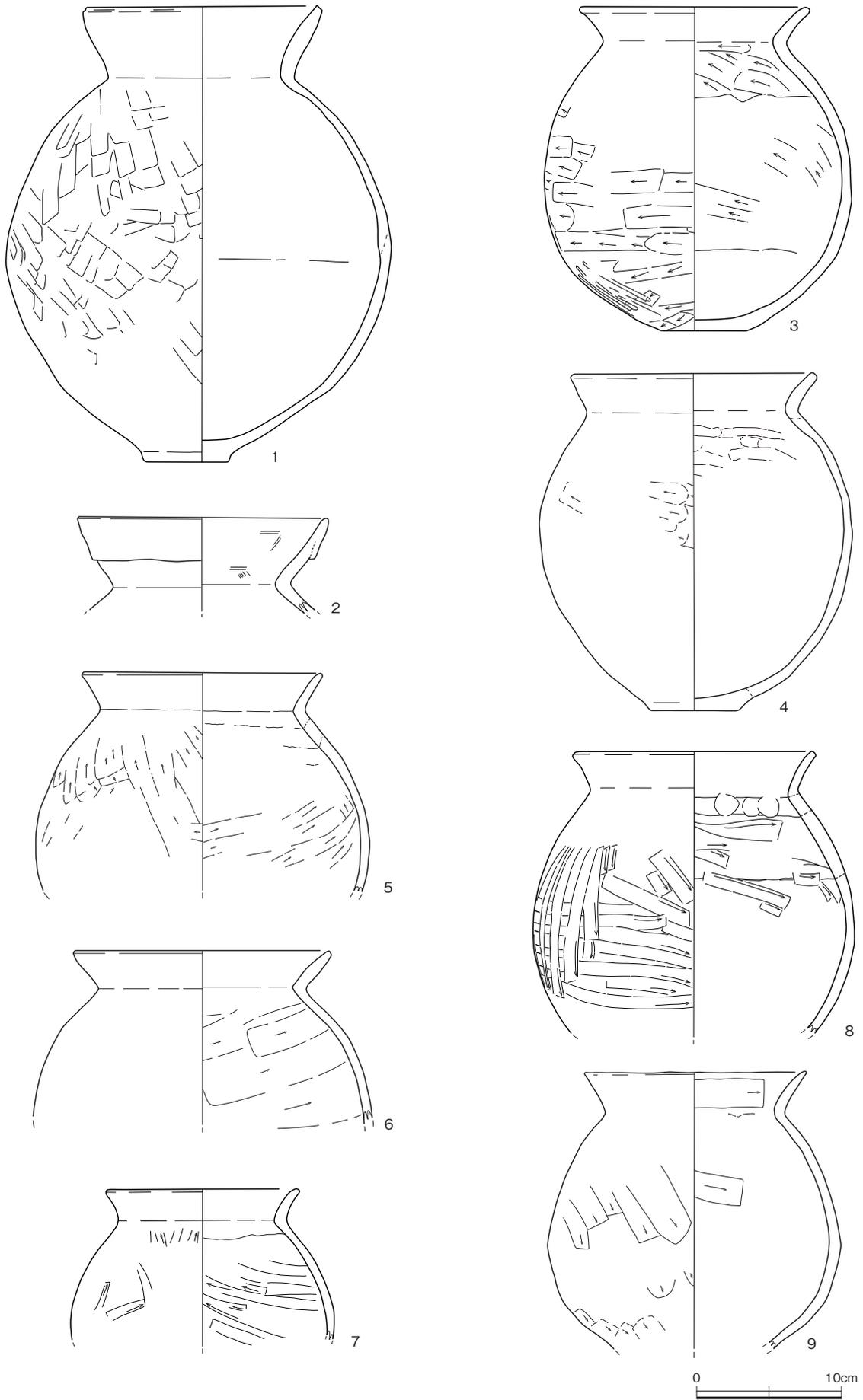
8図 看護職員等宿舎3号棟地点・5号棟地点古墳時代遺構全体図



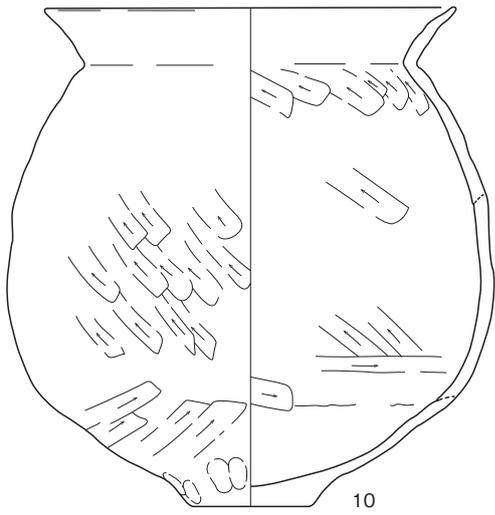
9 図 SI236 出土遺物



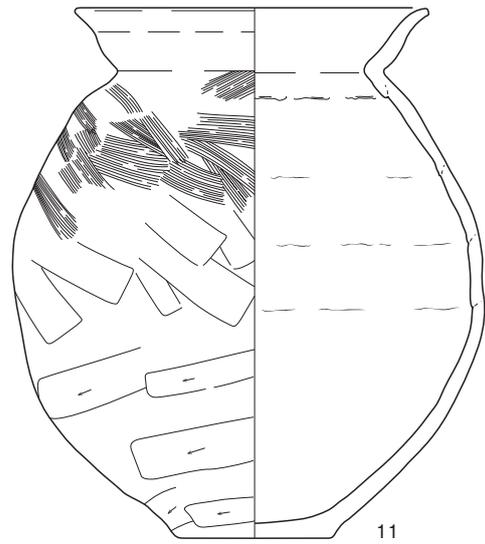
10 図 SI242 (SI07) 出土遺物



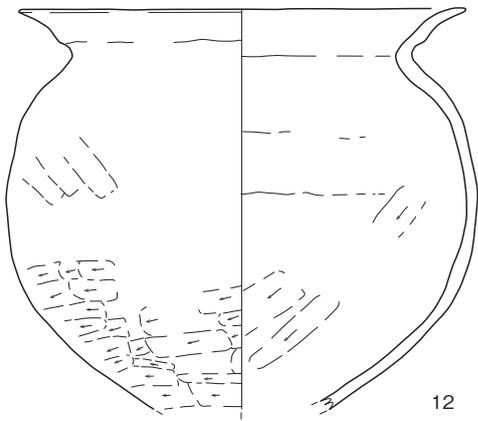
11 図 S1201 出土遺物 (1)



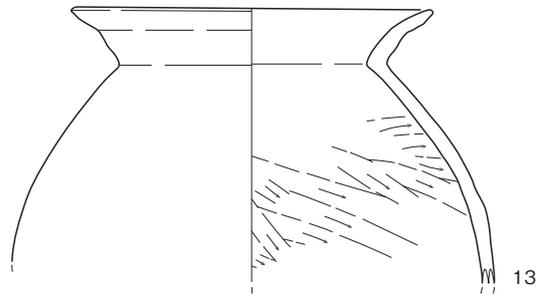
10



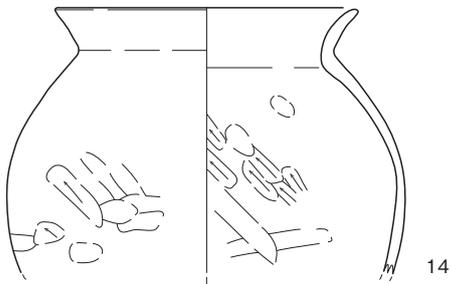
11



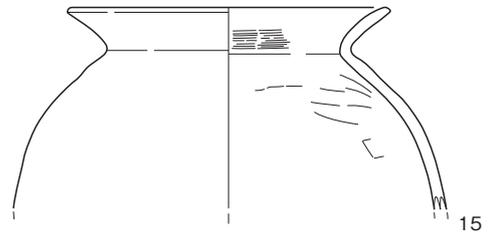
12



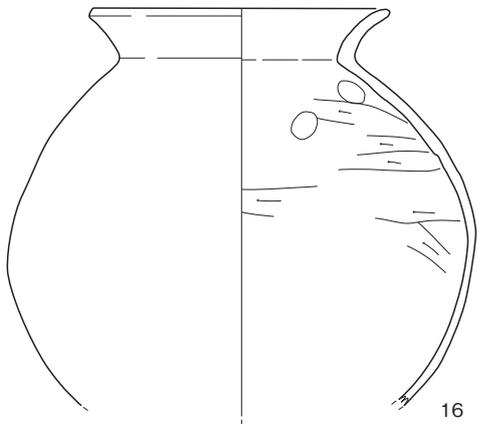
13



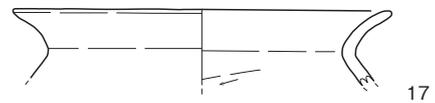
14



15



16



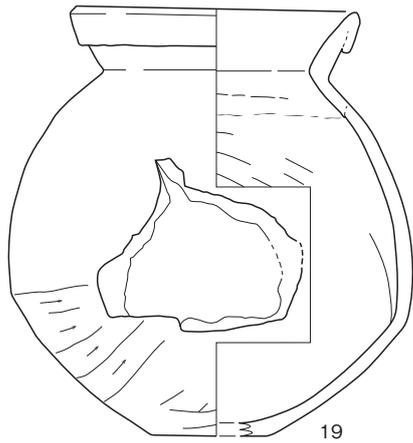
17



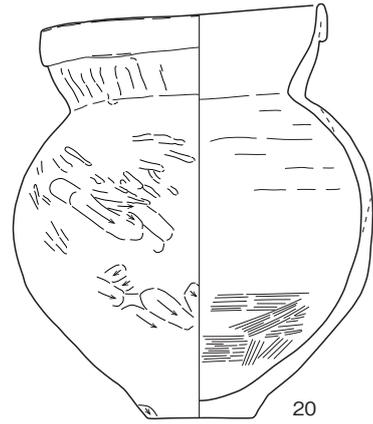
18



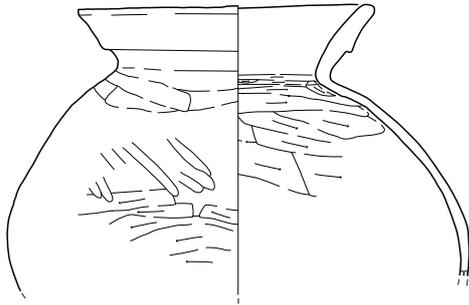
12 図 SI201 出土遺物 (2)



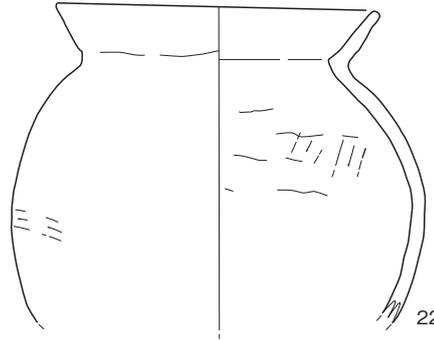
19



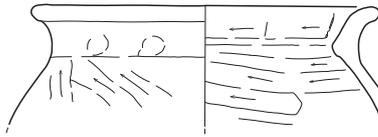
20



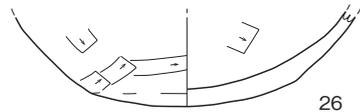
21



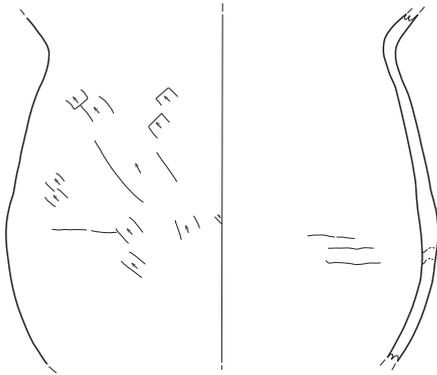
22



23



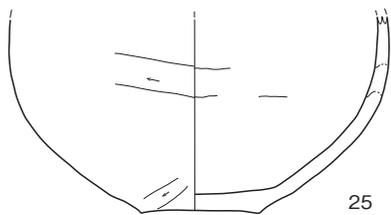
26



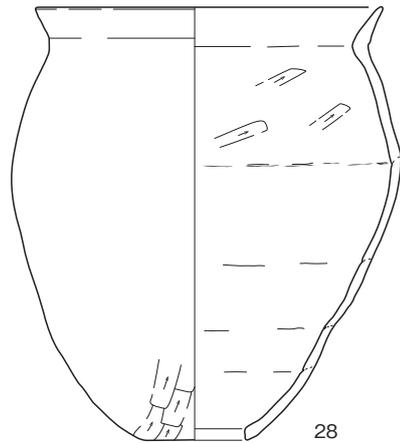
24



27



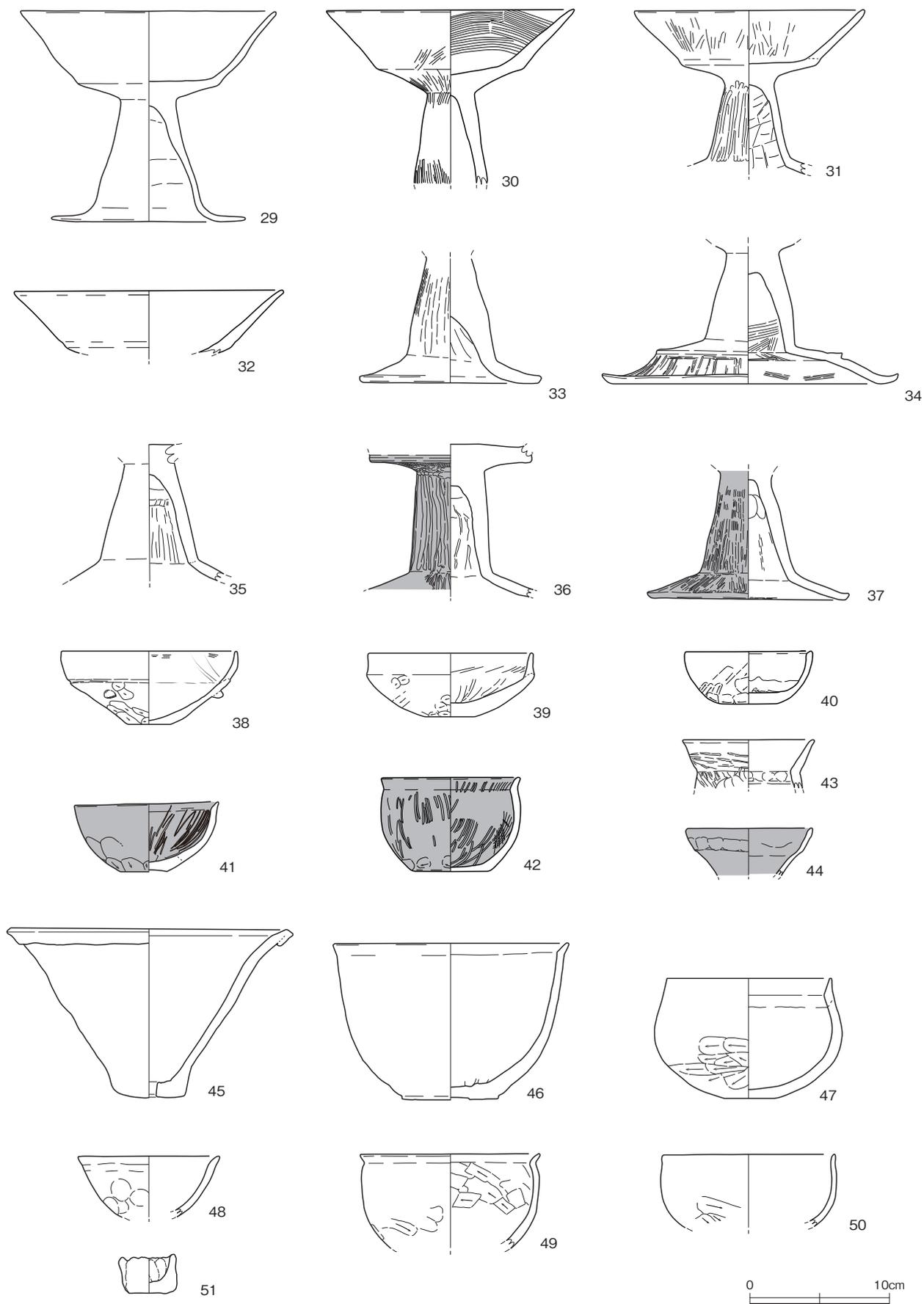
25



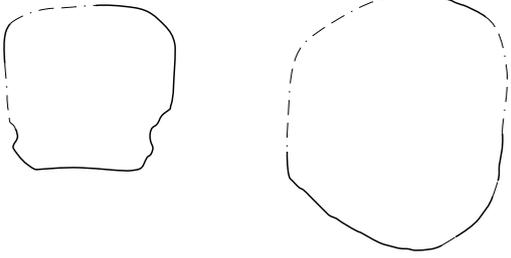
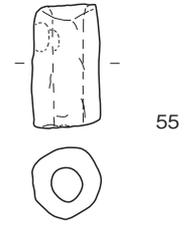
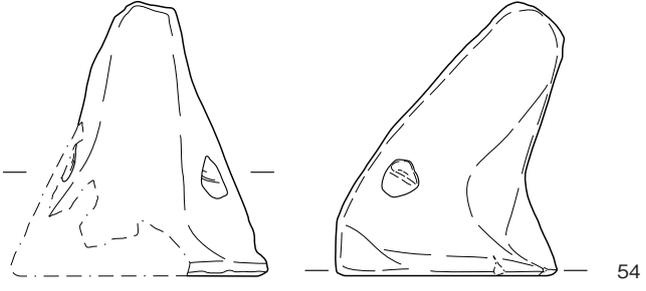
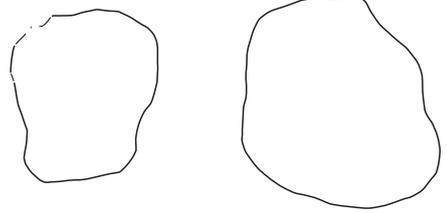
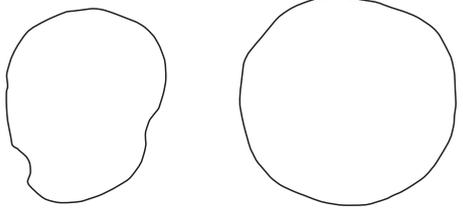
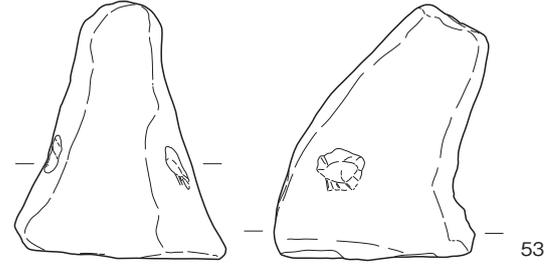
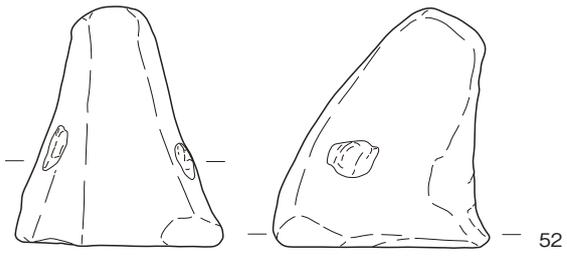
28



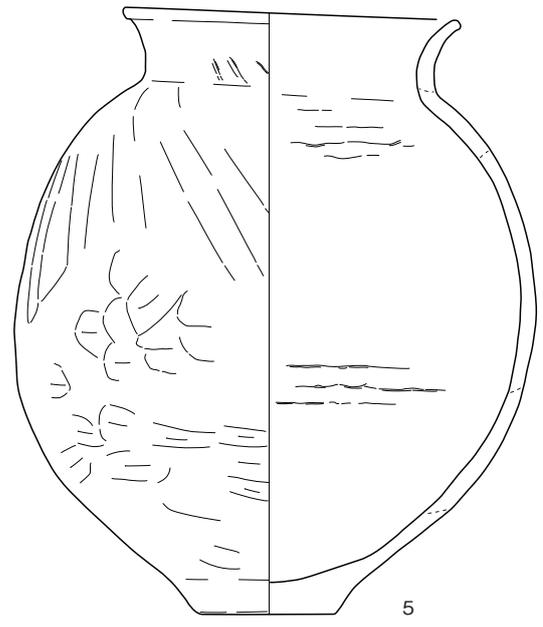
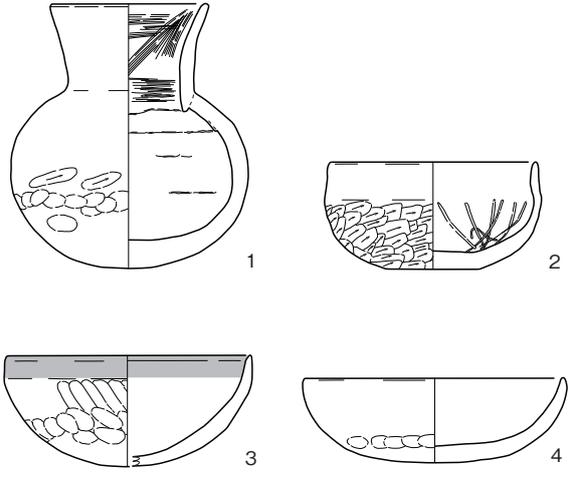
13 図 SI201 出土遺物 (3)



14 図 SI201 出土遺物 (4)



15 図 SI201 出土遺物 (5)



16 図 SI203 出土遺物



17図 【参考】医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点1・3次調査 弥生～古墳時代遺構分布図
 (遺構番号括弧内数字は1次調査時の付与番号を示す)

3 弥生式土器第1号と弥生町遺跡群形成の背景

はじめに

弥生式土器第1号はどこで発見されたのか 日本で農業が始まったとされる弥生時代。その時代の名称は、弥生式土器第1号が発見された、東京大学本郷キャンパス浅野地区の旧町名「向ヶ丘弥生町」から名づけられたものです。その弥生式土器第1号が発見された遺跡は弥生町遺跡と呼ばれていますが、それが出土したのがどの地点であったのかについてはたびたび論争が行われてきました。一方、この浅野地区で1975年に東京大学考古学研究室による発掘調査が行われ、弥生時代後期の環濠の一部や土器が発掘されました。このことを改めて振り返ると弥生町遺跡は弥生時代後期の環濠集落であることが確認されたのであり、集落はこの台地上の一角を占めていて、そのどこから弥生式土器第1号が発見されたとしてもおかしくないということがわかります(篠原1996)。

弥生町遺跡は環濠集落 その後の調査や研究で、この周辺の東京湾北西岸・武蔵野台地東部の地域には多くの弥生時代後期の環濠集落が分布していて、東海地方東部の菊川式土器に類似する土器を出土する遺跡が多いことがわかってきました。弥生時代後期にこの地域に新たに人が移り住み、環濠でかこまれた村を作って開発を行った。そのような弥生町遺跡群成立の背景に迫ってみたいと思います。

1. 弥生町遺跡群の実像

本郷台地の弥生遺跡の形成(1図) この本郷台地の弥生時代の遺跡の形成は、弥生時代中期に始まることがわかってきました。それは浅野地区とは射的場のあった谷を挟んだ対岸の本郷台地本体の北縁付近に認められます。中谷治宇二郎によってこの地点から弥生中期のものと思われる石斧2点(2図)が出土したことが報じられていたのですが、最近この周辺から弥生時代中期宮ノ台式期の竪穴建物跡もみつかるとい

篠原和大(静岡大学人文社会科学部) りました(山下2021)。この石斧2点は重要で、一点は有角石斧と呼ばれる銅戈を模したのから変化したと考えられる石器、もう一点は扁平片刃石斧と呼ばれる弥生時代特有の木器加工用の石器で、列島の弥生文化と共通して木製農具を作り、水稻農耕などを営む生活があったことを示しています。

この中期の遺跡と浅野地区の後期の弥生町遺跡との間を繋ぐ、中期末葉から後期前葉の遺跡は確認されておらず、弥生町遺跡の形成は後期に、また新たにに行われたと考えられるようです。

弥生町遺跡の環濠集落と その周辺 弥生町遺跡の集落部分の内容は、1975年の発掘地点以外はほとんどわかっていません。調査では断面V字形のB溝とそれを切って構築される断面台形のA溝が発見されました。B溝は調査区内で弧を描いて曲がっており、環濠であるとする集落を取り巻く南東角にあたる部分だと考えられます。一方、浅野地区の西側では、1996年以降埋蔵文化財調査室によって数回の調査が行われ、集落の推定域の西側に谷で隔てられて方形周溝墓が数基作られていることが明らかになり、この部分が墓域と考えられるようになりました。また、この谷の存在が分かったこともふまえて、私は、B溝が集落を取り巻く環濠の範囲を、調査地点を南東隅として台地の頂部付近を囲む長辺150mほどの範囲と考えました(篠原1999・3図)。この地域の弥生後期に一般的な規模の環濠集落であったと言えます。

2. 土器は語る

弥生町遺跡出土土器とその由来 1975年の調査ではB溝からまとまった土器が出土しています(4図2~9)。これらは、その由来から3群ほどの仲間に分けられそうです。2は、第1号土器によく似た形ですが、底部が飛び出さずに上げ底になる、胴下部に稜があってその附近を横ミガキする、頸部内面の接合痕や外面

の端末結節縄文など、菊川式土器の特徴をよく残しています。5～9は台付甕形土器ですが、口縁外面は縦、内面は横のハケ調整で口唇外面に刻み、胴部内面はナデ調整とするなどこれらも菊川式土器の特徴がみられます。2, 5～9は菊川式土器の特徴を持つ一群(A群)ということになります。菊川式土器というのは、現在の静岡県の大井川流域から天竜川までの太平洋側に分布する土器型式です(6図)。一方、3の装飾広口壺は南関東地域の久ヶ原式土器(7図)に組成するもの(B群)。4の甕形土器はハケ調整ですが平底で、口唇部には布目の刻みを施すなど、A群、B群の技術が変容したか、折衷したもの(C群)と位置付けられます。

方形周溝墓の土器(5図)は、壺のみからなりますが、赤彩やミガキが多用されるなど、菊川式の手法からはかなり変容した様子が見受けられます。2, 3の端末結節縄文を複数段施文する手法は、菊川式土器由来のもので、3の短い縄文帯を自縄結節文で区画する久ヶ原式土器由来の文様を施すものだけナデ調整で仕上げられている点など、A群、B群それぞれの伝統が残され、使い分けられているようにも見ることができます。

この周辺、武蔵野台地東部の弥生後期の各遺跡の土器は、上記のように菊川式由来のA群、東京湾岸久ヶ原式由来のB群とその変容や折衷(C群)とみられる事例からなる資料が多くみられます(8図～10図)。この地域に菊川式土器を作る集団が移住してきたと考えようまく説明できるようです。

弥生式土器第1号の来歴 弥生式土器第1号(4図1)はどう考えられるのでしょうか。壺形土器ですが、無花果形の形状や不完全だけれども端末結節縄文を施文する点、頸部内面の輪積痕などは菊川式土器の要素で、それらが変容したものと見ることもできます。しかし、突出して縁辺を調整しない底部の形状は、菊川式や久ヶ原式のそれとも違って、駿河湾岸の登呂式土器や雌鹿塚式土器(13図)のそれと似ています。そこで、私はかつてこれを駿河湾岸の土器の影響を受けたものと考えたことがありました。しかし、武蔵野台地東部で登呂式土器や雌鹿塚式土器の影響を受けた

土器は、その後も全く出土しないようです。ひとまずは、菊川式土器が変容したものの一つを考えておくのが妥当でしょうか。

3. 移動する人々

菊川式土器とその周辺 菊川式土器は、現在の静岡県中西部の東遠江地域に分布する土器型式ですが、それが南関東地域で出土するというのはかなり唐突に思えます。海を越えて移動するのだと考えられますが、その要因は、地域的な農耕文化の特色とそれに基づく社会にあるのではないかと思います。

静岡県内でも、安倍川などの中小河川による扇状地の発達する静岡・清水平野では、登呂遺跡のように農耕空間は灌漑水田を中心に沖積地の微傾斜地に広く拡大していきます。一方、大井川のような大河川の氾濫原には当時手が付けられなかったようで、菊川式土器の分布圏では、菊川流域のように流域の広い河川がなく、堆積が少なく、低平な平野部に丘陵がせまる地形がついています。低地部に水田は拡大せず、農耕空間は丘陵に拠った限定的な水田と畑地が組み合わさっていたようで、そうした農地を経営する集団は比較的小規模で分散的であったようです。静岡・平野の中期の有東式土器、後期の登呂式土器も整備された灌漑水田の経営に固執したためか、他地域への移動は全くと言ってよい程見られません。一方、菊川式土器やその前の中期白岩式土器は、関東地方などへの集団的な移動が知られていて、このような地域環境に適応した農耕戦略の違いが、集団の流動性にかかわっていた可能性が高いと考えられます。

菊川式土器の移動と環濠集落 菊川式土器の分布圏では、集落にかかわる溝はいくつか見つかっていますが、環濠集落が状態であるとは考えられません。一方、移動先では環濠集落を形成することが多いことが知られます。菊川式土器の移動先は武蔵野台地東部だけでなく、相模川西岸域、甲府盆地南部などの遠隔地への移動が知られています(14・15図)。いずれも低地部は低平で谷戸や丘陵部が迫るような地形が多く、菊川式土器の集団が、故地とよく似たそのような地形環境

の開発を得意としたことを思わせます。

4. 集う人々

再び弥生町の環濠集落とその周辺 弥生町遺跡が位置する武蔵野台地東縁には弥生後期に多くの環濠集落が造られるようになります(12 図)。和光市午王山遺跡、北区赤羽台遺跡、板橋区四葉地区遺跡、新宿区下戸塚遺跡などがそうした遺跡で、集落の初期に環濠が掘削され、菊川式土器に類似した土器を伴うのが特徴です。しかし、出土するのは菊川式系の土器だけではなく、東京湾岸系の久ヶ原式土器も出土し、菊川式土器と同じように変容したり、折衷土器が作られたりします。このことは、移動してきた菊川式土器の集団だけではなく周囲の集団からも人が参加して新たな集落形成と開発が行われたことが考えられます。

菊川式土器の移動の端緒は、和光市花ノ木遺跡の環濠で終末段階の白岩式土器が出土していて、中期末に遡る可能性があります。一方、多くの環濠集落は後期の前半段階に掘削されるようで、下戸塚遺跡など内陸部の遺跡もこの段階から始まるようです。弥生町の環濠の出土土器は、後期の中頃に位置づけられると考えられ、環濠の掘削がそれをどこまでさかのぼるかはわかりませんが、この地域の環濠集落の中では、比較的新しい段階に形成された可能性が考えられます。方形周溝墓の築造はさらに後続する時期が考えられますが、やはり、移動した集団だけではなく、周囲の先行した集落集団や周辺地域の集団も加わって開発が行われたことが推定できそうです。

本郷台の弥生の生業 先に、菊川式の集団が水田だけではなく畑地も運営したのではないかと想定しました。菊川式の分布域では水田の検出も少なく、畑もわかっていないのですが、レプリカ法という土器に含まれる圧痕を検出する方法では、白岩遺跡の資料からコメのほかにアワやキビ、エゴマなどが検出されています(篠原他 2017)。弥生町遺跡の環濠資料も調査が行われていてコメ 2 点、アワ 2 点が検出されました(守屋・山下 2023)。武蔵野台地東部周辺の弥生後期遺跡でもコメのほかにアワ・キビなどが比較的多く検出されることが知られています。やはり限定される水田域

に対して、アワ・キビなどの畑作も積極的に行ったことが推定できます。

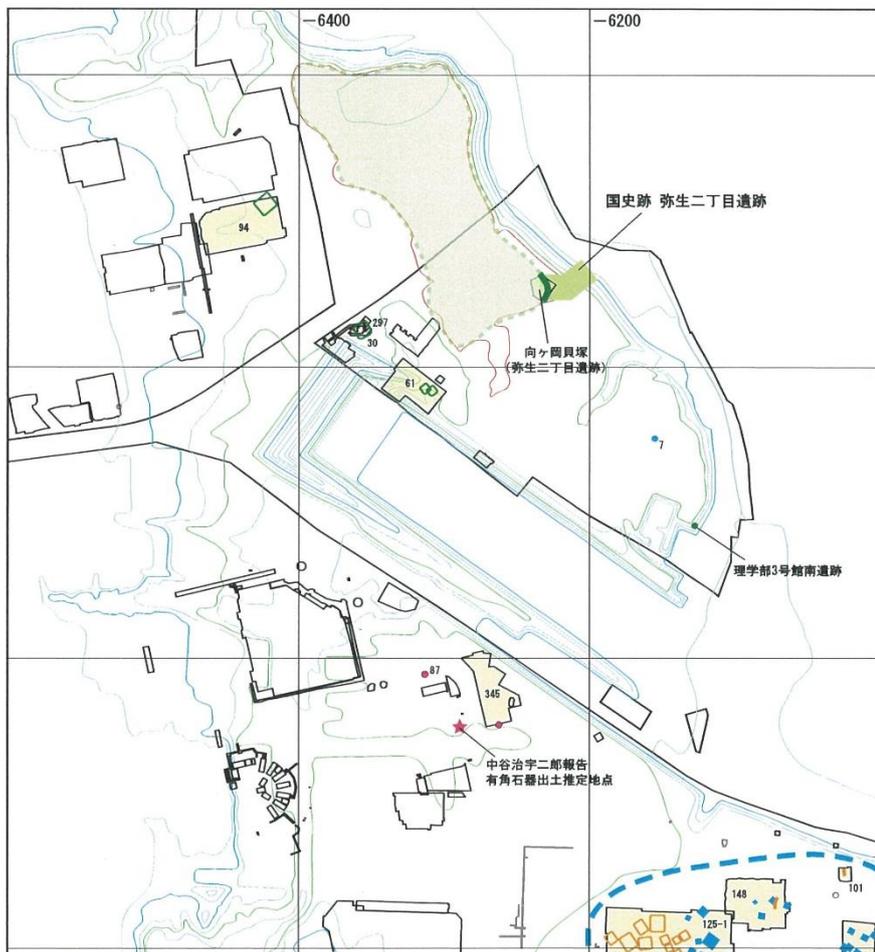
古墳時代へ 弥生町の後期の集落がどのように終わりを迎えたかはやはりはっきりしません。台地の先端や対岸の本郷台地上には古墳時代前期の集落が築かれるようになります。その土器の組み合わせは在来的な壺・甕に外来的な有稜高坏、器台、小型の壺類が加わってくるので、弥生後期から大きな変化があったことは想像に難くありません。

おわりに

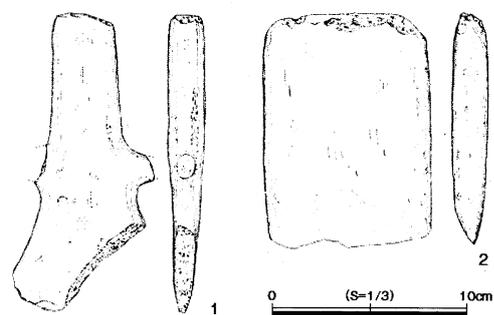
本郷台地の弥生遺跡、弥生町遺跡について発掘調査で明らかになっていることは、必ずしも多くありません。しかし、弥生時代研究の進展によって弥生式土器第 1 号を出した遺跡成立の東海から関東を結ぶ壮大な背景が明らかになってきているようです。

参考文献

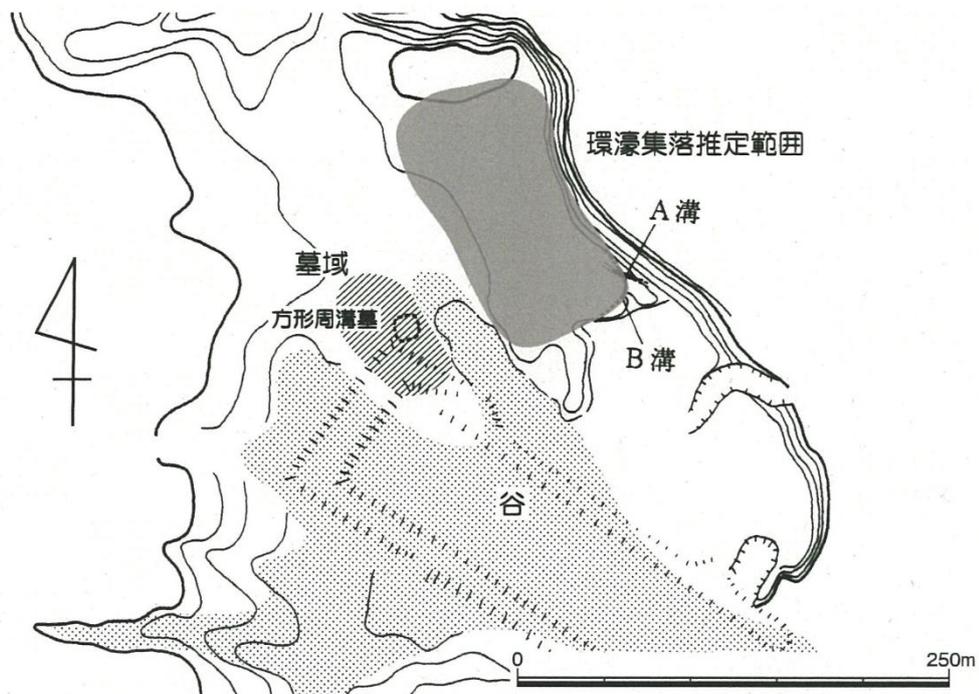
- 鮫島和大 1994 「南関東弥生時代後期における縄文施文の二つの系統」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 12 号
- 鮫島(篠原)和大 1994 「壺形土器(重文指定)」『東アジアの形態世界』東京大学総合研究資料館
- 篠原和大 1996 「弥生町の壺と環濠集落」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 14 号
- 篠原和大 2006 「登呂式土器と雌鹿塚式土器－駿河湾周辺地域における弥生時代後期の地域色に関する予察－」『静岡県考古学研究』38
- 篠原和大 2009 「Ⅷ 弥生町遺跡の考古学的評価」『東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 I』
- 篠原和大他 2017 「静岡県内弥生時代植物関連資料調査報告」静岡大学考古学研究室調査研究集報 2016
- 東京大学文学部考古学研究室 1979 『向ヶ岡貝塚－東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告書』
- 山下優介 2021 「東京大学本郷港内の遺跡 東京都下水道地点の発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』14
- 守屋亮・山下優介 2023 「東京湾岸における弥生時代の栽培植物利用」『東日本穀物栽培開始期の諸問題』



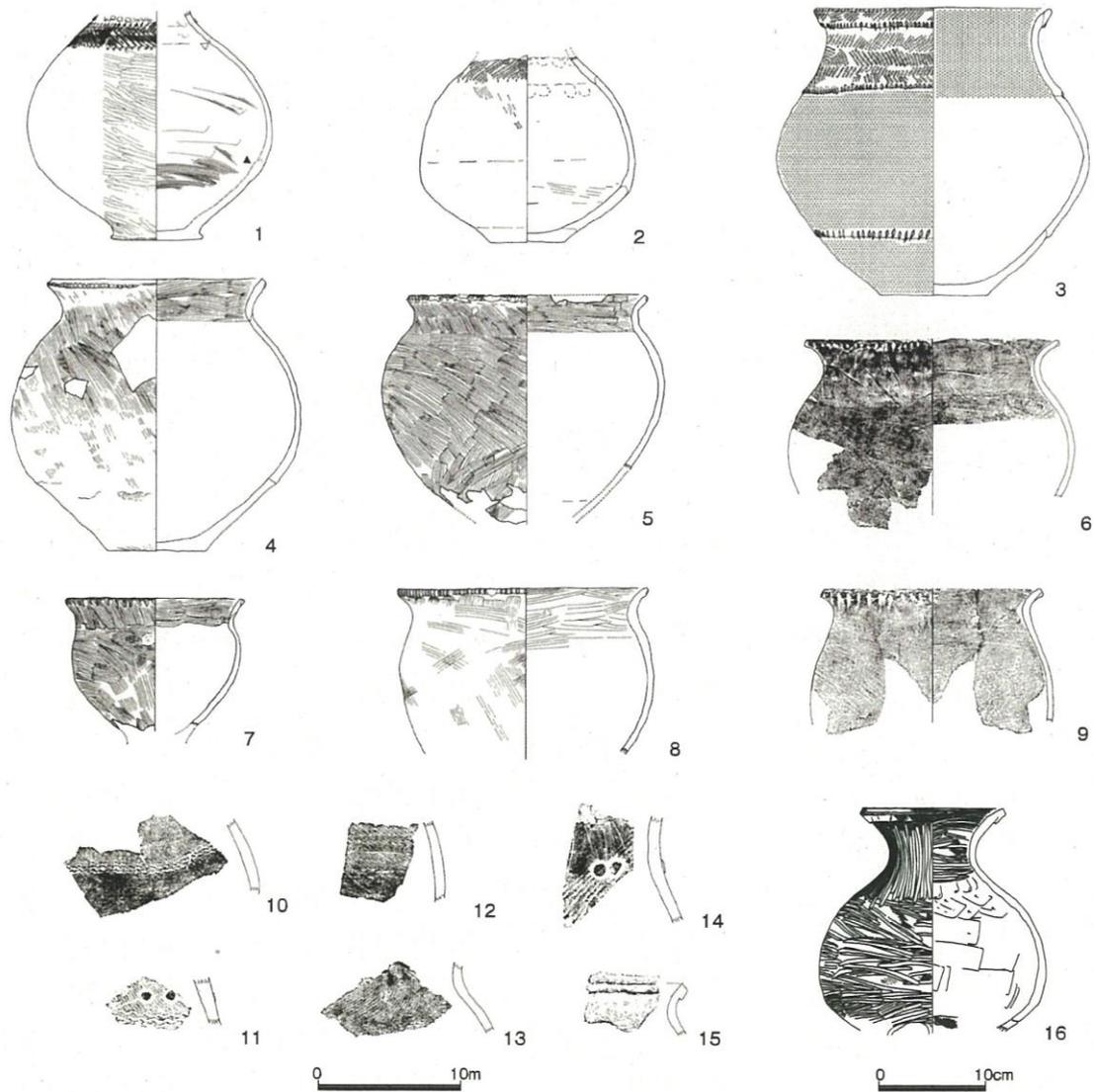
1 図 本郷地区弥生・古墳時代以降分布 (S=1/2500)
(成瀬・堀内 2025 から)



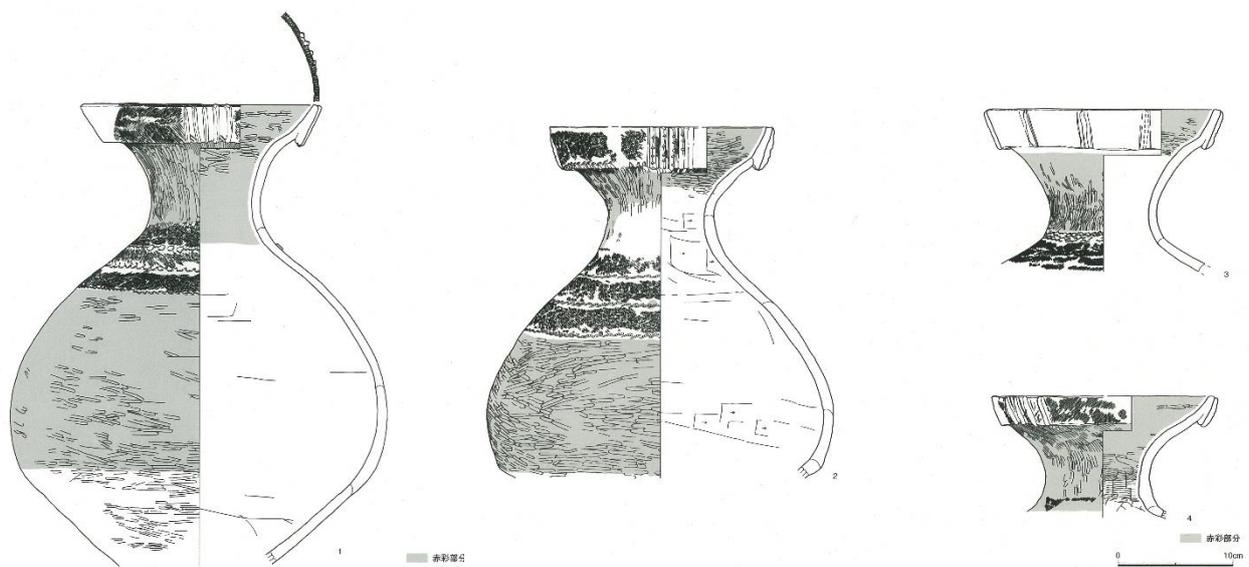
2 図 中谷治宇二郎報告の石斧
(山下 2021 より転載)



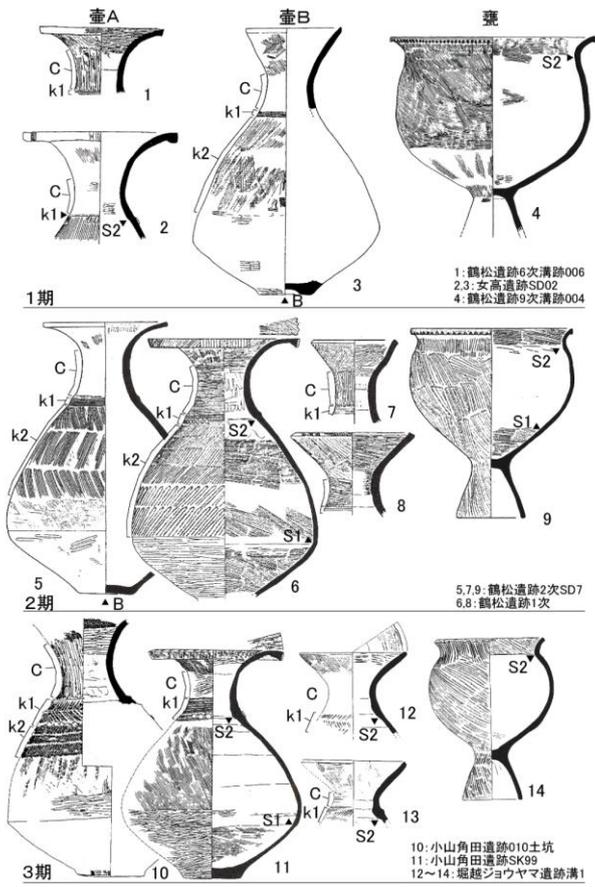
3 図 弥生時代後期の弥生町遺跡推定図 (篠原 2007 より転載)



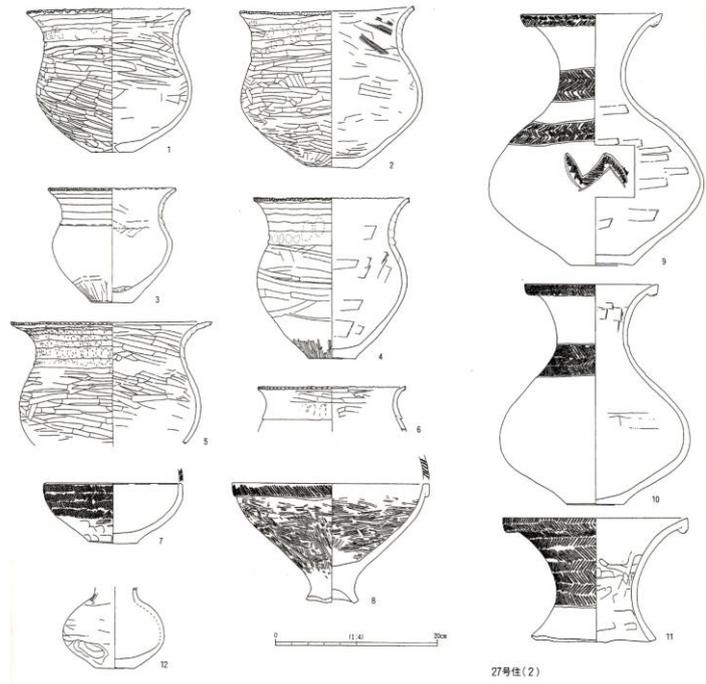
4 図 弥生町遺跡出土後期弥生土器（篠原 2007 より転載）



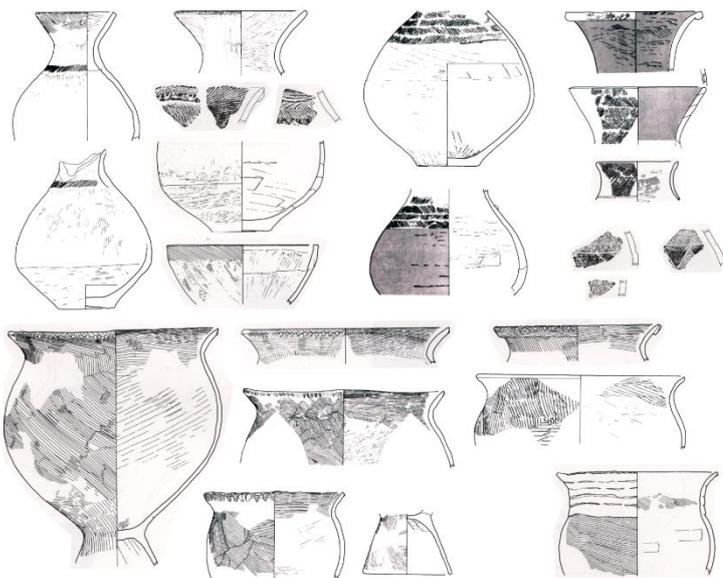
5 図 工学部武田先端地ビル地点 1 号方形周溝墓・包含層出土土器
（東京大学埋蔵文化財調査室 2009 より転載）



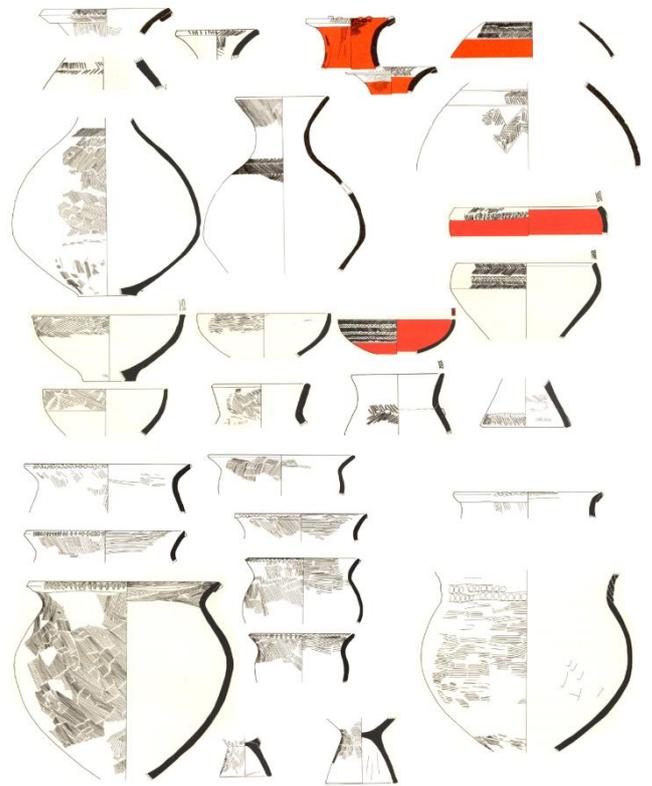
6 図 菊川式土器の壺と甕の変遷（後期前～中葉）
（篠原 2006 より転載）



7 図 久ヶ原式土器（千葉県打越遺跡）
（報告書より転載）



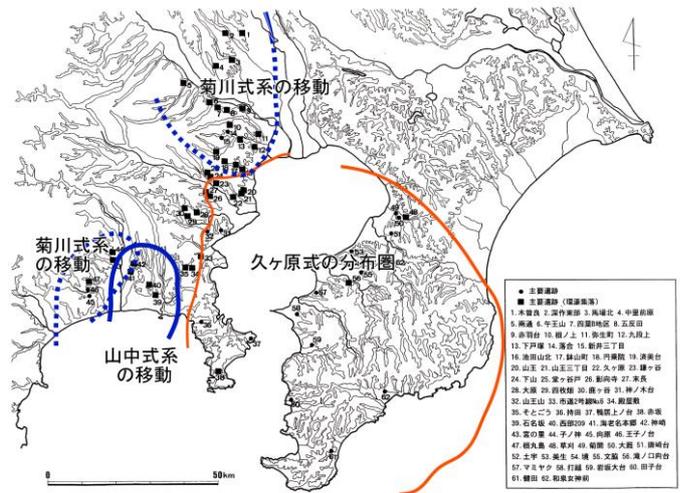
8 図 和光市花ノ木遺跡出土土器
（報告書より転載）



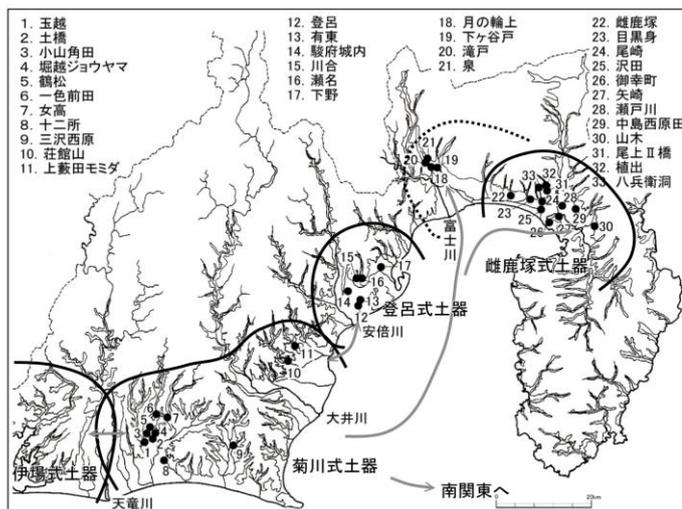
9 図 新宿区下戸塚遺跡出土土器
（報告書より転載）



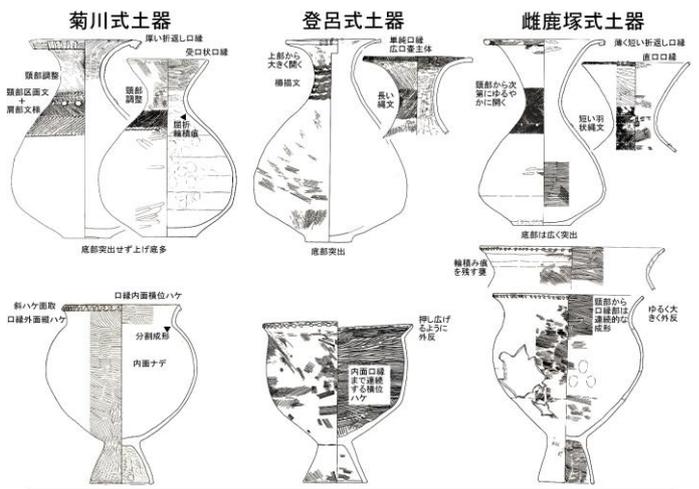
10 図 板橋区西台後藤田遺跡出土土器（報告書より転載）



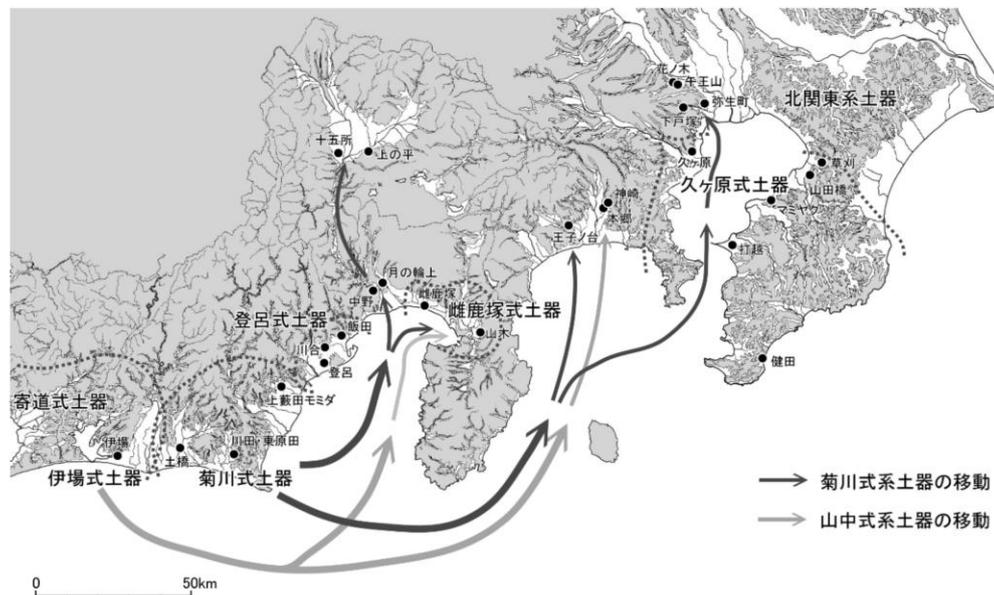
11 図 南関東地方の弥生後期土器の分布圏と環濠集落
（篠原 1998「弥生土器の生産と規格性」『人文論集』）



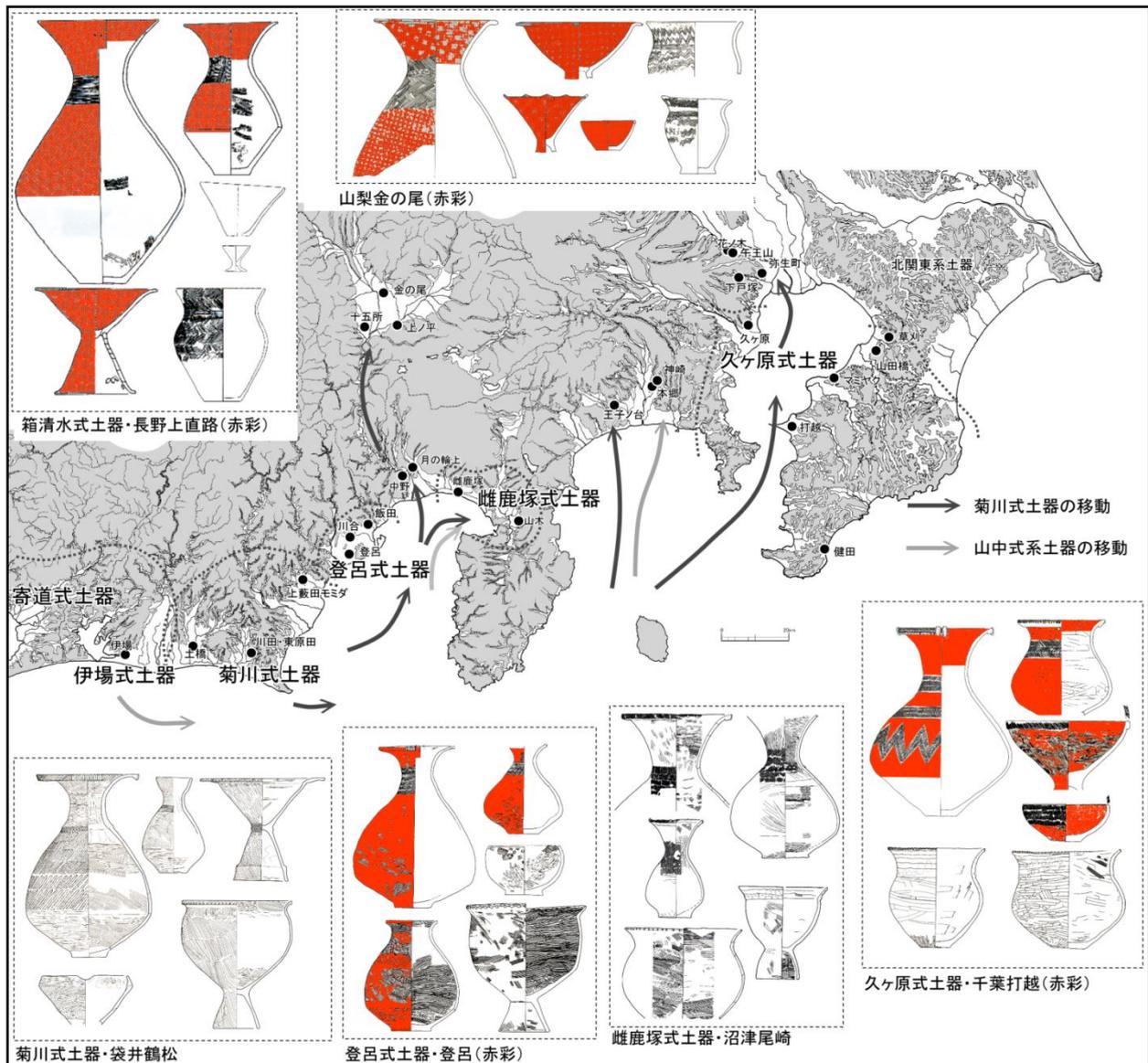
12 図 静岡県内弥生後期土器型式の分布圏（篠原 2006）



13 図 菊川式、登呂式、雌鹿塚式土器の壺甕の比較（同左）



14 図 中部太平洋岸地域の弥生後期の土器の移動（『藤枝市史通史編上』より転載）



15 図 東海東部～南関東地方の弥生後期の土器とその移動

(篠原 2012 「登呂の時代の駿河と赤彩土器」『赤い土器の世界』より転載)

4 発掘調査からみえた古墳時代の本郷台

国立歴史民俗博物館 研究部 助教

山下 優介

はじめに

古墳時代の代表的な考古資料というと、まず思いつくのは、前方後円墳や前方後方墳といった名称でよく知られている巨大な古墳だろう。全国各地に築かれた古墳は今でも墳丘を確認できるものが数多く存在し、築造時の雄大な姿に復元されている例もあるが、東京大学本郷キャンパス構内には、地表に墳丘を残す古墳は存在していない。そのためだけではないだろうが、これまで本郷台の古墳時代に関する議論は決して多くない。その一方で、本郷台の弥生時代については、弥生土器・弥生時代という名称の由来となった「弥生式土器第1号」の存在もあり、長らく注目されるとともに議論が重ねられてきた経緯がある。しかし、近年までに東京大学埋蔵文化財調査室（以下、調査室）が実施した発掘調査の成果をみると、古墳時代の遺構や遺物の方が弥生時代よりも実は確認例が多く、古墳時代に本郷台で暮らした人びとの様子がわかるようになってきている。本稿では、古墳時代に関する調査成果を振り返りながら、本郷台の弥生時代から古墳時代がどのように移り変わったのか考えてみたい。

本郷台における古墳時代の開始と外来系土器

古墳時代がいつから始まったのかという問題は、どの墳墓からを古墳と見なすかという重要な問いに直結するため、簡潔に答えることは難しい。本稿では、近畿地方におけるいわゆる定型化した前方後円墳の成立を重視し、奈良県桜井市箸墓古墳の築造を画期として、古墳時代の開始ととらえる。その時期以降を関東地方でも古墳時代として扱いたい。

前方後円墳の出現に重きを置くが、その一方で、関東地方において古墳時代が始まる頃（古墳出現期）をとらえようとした時、日常生活に使用される土器の変化への視点が必要になる。近畿地方で前方後円墳が成立する前段階には、土器が本来の製作地から遠く離れた地域で出土する例が全国的に目立つようになる。古墳出現期を対象とした考古学研究では、搬入品だけでなく模倣品も含め、故地が遠方にあるそれらを「外来系土器」と呼んで注目してきた。著名なものには、河内平野や奈良盆地に分布の中心をもつ庄内形甕や、濃尾平野を発信源とするS字状口縁台付甕（S字甕）があるが、本郷台の古墳時代を論じる上でより注目されるのは後者や、S字甕を含む「東海系土器」と呼ばれる土器（図1）である。

伊勢湾沿岸部や濃尾平野などの東海地方西部に系譜をもつ「東海系土器」には、煮沸・調理用の土器であるS字甕だけでなく、「パレス・スタイル壺」や、「ヒサゴ形壺」といった貯蔵具の壺

や、供膳具の高坏などがある。古墳出現期の関東地方では各地の遺跡で東海系土器が確認されるようになり、土器の器種構成が大きく変化する。このような東海系土器の流入とともに、千葉県市原市神戸5号墳や4号墳、千葉県木更津市高部30号墳や32号墳などの、出現期の古墳にみられるような墓制の変化も認められ、その影響は土器の変化に止まらなかったことがわかる。

東海系土器の影響は本郷キャンパス構内の遺跡（以下、構内遺跡）でも明確に認められる。看護職員等宿舎1号棟地点のSI1001では、ほぼ完形のヒサゴ形壺（図2-1）や、椀形の坏部の下方に段をもつ大小の有段高杯（図2-3～6）が出土している。これらの土器は在来の土器に系譜を辿ることができないが、その一方で故地の土器が完全に再現されているかという点ではない。ヒサゴ形壺の口縁端部に認められる外側への屈曲が弱い点や、有段高杯の器壁が厚く、赤彩品が多い点などはこれらの土器が在地で製作されたことを示す根拠となるだろう。また、図2-7のパレス・スタイル壺の装飾をもつ壺についても、土器の胎土や文様の特徴から、在地で生産されたと考えられる。このことから、既に東海系土器が本郷台の人びとに受容され、日常的な土器の一部となっていたと考えられる。

臨床試験棟地点から出土したS字甕や、S字甕の影響を強く受けた甕は、東海系土器の受容を考えるうえで興味深い状況を示している。SI01から出土したS字甕（図2-9・10）は、胎土や口縁端部の仕上げ方、あるいは器壁の薄さといった点から、故地の特徴をよく再現したS字甕といえる。それに対してSI04から出土した甕（図2-11）は、口縁部の形状はS字甕と同様な受口状であるが、細部は大きく異なっている。口縁端部は少しつまんだ程度に仕上げられ、頸部の屈曲も弱い。また器壁の厚さや胎土の点から見ても、故地の特徴が失われているといえるだろう。SI01とSI04から出土した資料はどちらも小破片に過ぎないため、その変化を積極的に評価するには注意が必要であるが、東海系土器が受容される過程を端的に示している例と捉えられないだろうか。

看護職員等宿舎5号棟地点のSI236から出土した椀形の坏部をもつ高坏（図3）は、先に述べた東海系の有段高杯に系譜をもつものである。しかし、坏部の段を痕跡的に留めた形状や、脚部の開き具合から、既に在地の土器の一部となった姿を示している。

以上のように、構内遺跡では看護職員等宿舎1号棟地点や臨床試験棟地点から出土した東海系土器に、本郷台における古墳時代のはじまりを窺うことができる。ただし、土器の内容をみると東海系土器の受容はあくまで客体的と考えられ、故地の土器そのものとは異なる土器が当初から存在している。このことに注意すれば、東海系土器が流入した影響を直接的に受けた地ではなかったと評価できるだろう。

本郷台における古墳時代の墓制に関する予察

外来系土器の影響は、土器だけでなく他の文化要素にも目に見える影響を及ぼすことが多く、その影響が墳墓に表れることもある。古墳出現期の関東地方では、出現期の前方後方墳や前方後方形周溝墓などが好例として知られているが、本郷台にそのような墓制の変化があっただろうか。

医学部附属病院の北側に位置するクリニカルリサーチセンターA棟I期地点や、隣接する国際

科学イノベーション総括棟地点では、古墳時代前期に属する複数棟の竪穴建物に加えて、複数基の方形周溝墓の周溝が検出されている（調査室 2017b・2017c）。この周溝墓群の築造時期や周辺の居住域との対応関係などの評価に関しては、各遺構や出土遺物の詳細が明らかになった後にあらためて議論すべきだが、過去に示された復元案（成瀬 2018）では 10 基程度が図示されており、本郷台における古墳時代の墓域の中心であったことを推察できる。

また、ドナルド・マクドナルドハウス東大地点では、底部が焼成前に穿孔された二重口縁壺が出土している（図 4）。口縁部の形状や胴部のプロポーションなどから、古墳時代前期後半頃の土器と考えられる¹。同様な規格の壺がこのほかに複数点出土したわけではないため、今後の調査・研究の進展によって慎重に判断しなければならないが、このような壺が墳丘上に並ぶ古墳が周辺に存在した可能性も視野に入れるべきであろう。周辺の遺跡でこのような二重口縁壺が出土する例は多くないが、北区の赤羽台遺跡の 3 号方形周溝墓（図 5）では、複数の赤彩された二重口縁壺が周溝内から出土している。

本郷台の古墳時代中期集落

近年の研究成果として注目されるのが、看護職員等宿舎 5 号棟地点の発掘調査によって明らかになった、古墳時代中期の集落である。最近の発掘調査により、調布市染地遺跡などでも複数棟の古墳時代中期の竪穴建物が確認されている（東京都埋蔵文化財センター 2023）が、東京都域では当該期に属する資料が極めて少ないことが指摘されており（福田他 1995）、その後の研究でも傾向は大きく変わっていないことが窺える（大西 2011）。そのようななかで、看護職員等宿舎 5 号棟地点で 5 棟以上の竪穴建物が確認されたことは、重要な意義をもつだろう。

古墳時代前期から中期にかけて生じた変化を考えるため、出土遺物を中心に本地点の調査成果をみてみたい。まずは検出された竪穴建物の詳細な時期が問題になる²。最も多くの遺物が出土した遺構が SI201（図 6）である。所属時期を判断するうえで重要な資料の一つが、遺構の床面に近い位置からほぼ完形で出土した甗（図 6-1）である。このような甗形の大型甗は古墳時代中期後半に採用される器種であり、カマド（図 7）の導入と関係が深い資料である。しかし、興味深いことに SI201 はカマドをもたず、土製支脚（図 6-2～4）とともに地床炉の使用が続けられていた。

坏類が一定量出土している点も、SI201 の時期を中期後半とすることの妥当性を示している。ただし、塊・坏類はすべてが平底を有するが、新しい時期の坏類の特徴といえる定型的な一群とみなせる資料がない。加えて、図 6-5・6 の口縁部の形状に須恵器坏の影響が窺えるが、これも典型的な「須恵器模倣坏」とは異なる。以上をふまえれば、坏類が普及する中期後半の中でも、古相の資料と理解できる。

SI212 は、東側およそ半分が調査区外にあるため調査が限定的であったにもかかわらず、SI201 に次いで多くの遺物が出土した。甗形で底部が筒抜け状になる甗（図 8-1）があることから、SI201 と同様な中期後半に位置づけることができる。SI212 出土資料のなかで注目したいものは、須恵器のはそう甗を模倣した小形壺（図 8-2）である。関東地方における須恵器の甗を模倣した土器

については、モデルを必ずしも正確に映していないことに留意しながらも、近畿地方の須恵器の型式である TK216 型式の甕を模したことが推測されており、須恵器と土師器の伴出例が関東地方で増加する前の段階に出現することが指摘されている（長谷川 1991）。

古墳時代中期に属すると判断した他の竪穴建物は遺物の出土量が SI201・SI212 ほど豊富ではなかったが、土器の特徴から上の 2 棟と概ね同時期の建物と理解できる。看護職員等宿舎 5 号棟地点には、古墳時代中期後半に竪穴建物群が形成されたと考えられる。具体的な時期が明らかになったことで問題となるのは、古墳時代前期の中期の集落の間に認められる空白期間である。

看護職員等宿舎 1 号棟地点や臨床試験棟地点で確認された古墳時代前期前半の遺構に対して、前期後半の遺構は数が少なく、看護職員等宿舎 5 号棟では、SI242 などの一部の竪穴建物が該当する（図 9）。ドナルド・マクドナルドハウス東大地点の資料も前期後半の資料であることをふまえれば、当該期にも集落は継続していたと理解できる。しかし、その後の中期前半になると、現状で確実な遺構が確認できていない。この現象については、南関東地方の各地で同様な状況が認められている。広範囲に集落の衰退を引き起こした要因については、各遺構の詳細な時期比定の問題も含め、今後も議論しなくてはならない問題といえよう。

本郷台における古墳時代の集落動態

構内遺跡を対象とした弥生時代から古墳時代の集落動態については、過去に論じたため（山下 2024）、ここでは古墳時代に絞って要点を述べ、本稿のまとめとしたい（図 10）。

古墳時代になると集落の中心は浅野地区から本郷地区へと移り、現在の医学部附属病院やその関連施設に占められる東側の台地縁辺部に集中的な居住が認められる。先に紹介した看護職員等宿舎地点 1 号棟地点（19）や、臨床試験棟地点（21）の古墳時代前期の竪穴建物群がその代表例である。この一帯は、古墳時代前期における居住域の中心であった可能性が現状で最も高く、そこには東海系土器を新たに受け入れた人びとが暮らしていたと考えられる。

古墳時代前期の居住域は、上述の 2 地点に限られるわけではない。入院棟Ⅱ期地点（113）で前期から後期にかけて 15 棟程度が確認されている（調査室 2015、同 2017a）ほか、基幹整備（流域⑧排水）A 区地点（97-1）や、ドナルド・マクドナルドハウス東大地点（101）で前期の竪穴建物が検出される（調査室 2012a・2012b）。また、墓域に関してふれた 2 つの地点（125-1・148）でも複数棟の古墳時代前期の竪穴建物が確認されており、台地の東側縁辺部一帯に濃密に分布するようである。

クリニカルリサーチセンター A 棟 I 期地点（125-1）や、国際科学イノベーション総括棟地点（148）で検出された複数基の方形周溝墓の周溝に関しては詳細な報告を待って論じるべきではある。しかし、周溝の位置関係や規模、近接する地点の調査成果等を考慮したうえで、本稿では仮に古墳時代前期の墓域と捉え、古墳時代前期には東へ注ぐ小支谷に南北を挟まれた舌状台地上のやや北寄りの範囲に、墓域を含む集落が形成されていたと積極的に理解したい。

古墳時代中期になると、看護職員宿舎 5 号棟地点へと居住が集中する様子が窺える。周辺に目を向けると臨床試験棟地点や入院棟 A 地点（23）で複数棟の古墳時代中期の竪穴建物が確認され

(調査室 2016・2021a)、基幹整備(流域⑧排水) B区地点でも中期の遺構が検出されている(調査室 2022)。また、看護職員等宿舎ゴミ置き場地点(25)にも中期の遺構が認められた(調査室 2025)。ただし、看護職員等宿舎5号棟地点と同程度の竪穴建物や遺物が検出された地点はなく、古墳時代中期における集落の中心は本地点付近であったと理解できる。

古墳時代後期については十分な説明ができなかったが、本郷台では竪穴建物が集中する地点が不明確となる。看護職員等宿舎5号棟地点の中期末～後期初頭の竪穴建物1棟を報告したが、別の地点等で同時期の遺構は確認できていない。医学部附属病院中央診療棟(4-1)ではカマドをもつ古墳時代後期の竪穴建物が1棟検出されているが(東京大学遺跡調査室 1990)、両者の時期的な隔たりも考慮すると、後期の居住域の範囲は現状で不明である

おわりに

本郷キャンパス構内遺跡の発掘調査成果を整理することで、古墳時代における集落の変遷過程を論じた。個々の資料は断片的なことも多いが、蓄積された情報をつなぎ合わせることで本郷台の古墳時代に対する概要を示すことができたと考える。今後の調査・研究によって前期の集落の実態についてはさらに明らかになることが期待できるため、詳細な変遷や集落内部に関する分析は継続的な課題である。また、本郷台の様相がより鮮明になった先には、近年明らかになりつつある周辺地域の同時期集落との比較が可能となるだろう。本郷台の様相を一つのケーススタディとして、東日本における、古墳時代のはじまりや古墳時代前期と中期の変化の問題に対して議論を深めていきたい。

本研究は、公益財団法人高梨学術奨励基金による令和3年度若手研究助成ならびに、科学研究費助成事業若手研究(課題番号 23K12308)の助成を受けた。

注

¹ ドナルド・マクドナルドハウス東大地点出土二重口縁壺の所属時期は、古屋紀之による分類と編年案(古屋 1998)を参照した。

² 所属時期の検討については報告書の内容(山下 2024)をもとにしている。誌面の都合もあるため、所属時期の検討にあたって参照した先行研究については、代表的な編年研究(比田井 1988、福田他 1999)を除きここでは割愛する。

参考文献

大西雅也 2011「多摩丘陵を中心とした古墳時代集落の展開」『東京考古』29

公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 2023「調布市染地遺跡―第128地点(多摩川住宅商業施設建設に係る埋蔵文化財発掘調査)―」東京都埋蔵文化財センター調査報告 第374集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第

73 集

- 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター 2002『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012a「本郷97 基幹整備（流域⑧排水）A区地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012b「本郷101 医学部附属病院ドナルド・マクドナルドハウス」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2015「本郷113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期1次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2016『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟A地点 報告編《第1分冊》』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017a「本郷113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期3次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017b「本郷125 医学部附属病院クリニカルリサーチセンターA棟1期」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017c「本郷148 国際科学イノベーション総括棟新営」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021a『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院 看護職員宿舎1号棟地点 臨床試験棟地点 看護職員宿舎3号棟地点（1）』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2025「東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院 看護職員等宿舎ゴミ置き場地点」『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』17
- 長谷川厚 1991「7 関東」石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』雄山閣
- 成瀬晃司 2018「先史時代の本郷キャンパス 二万数千年前の痕跡」東京大学キャンパス計画室編『東京大学本郷キャンパス 140年の歴史をたどる』東京大学出版会
- 比田井克仁 1988「南関東五世紀土器考」『史館』20号
- 古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本の古墳時代の開始—」『駿台史学』104号
- 福田健司・清野利明・中山弘樹 1999「東京都における5世紀の土器と問題点」『東国土器研究』5号
- 山下優介 2024「本郷台地における古墳時代の集落変遷」『東京大学本郷構内の遺跡 看護職員等宿舎5号棟地点、看護職員等宿舎3号棟地点（2）』東京大学埋蔵文化財調査室
- 横浜市歴史博物館 2010『古墳時代の生活革命—5世紀後半・矢崎山遺跡』

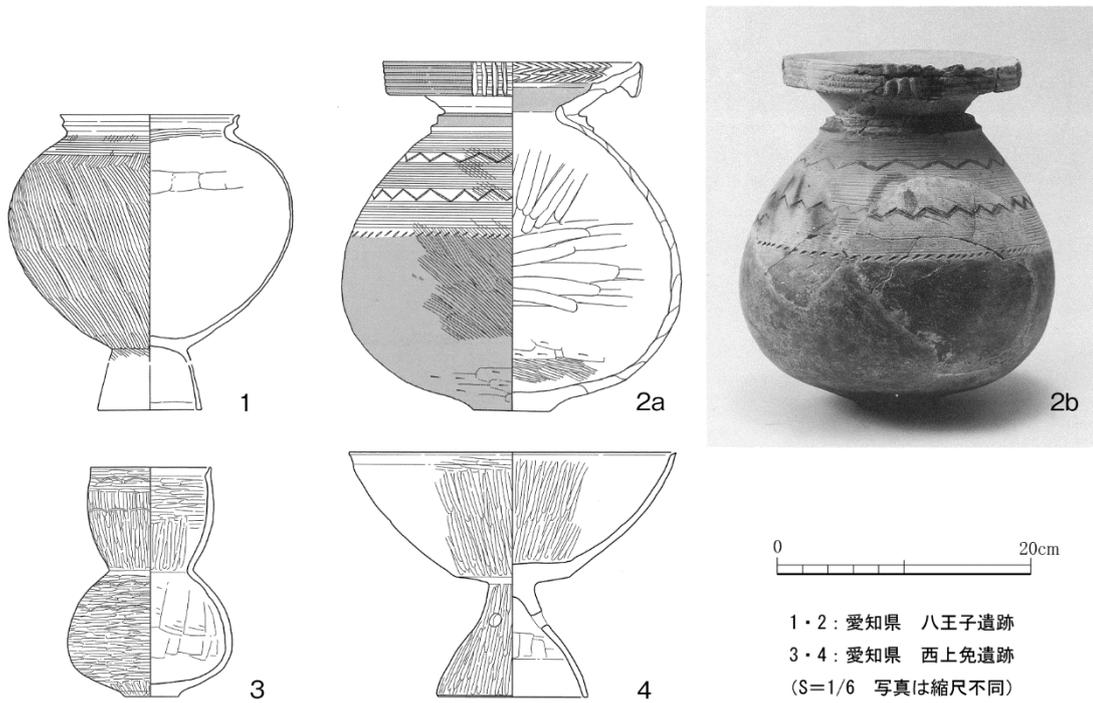


図1 「東海系土器」の代表的な器種（各報告書より再構成）

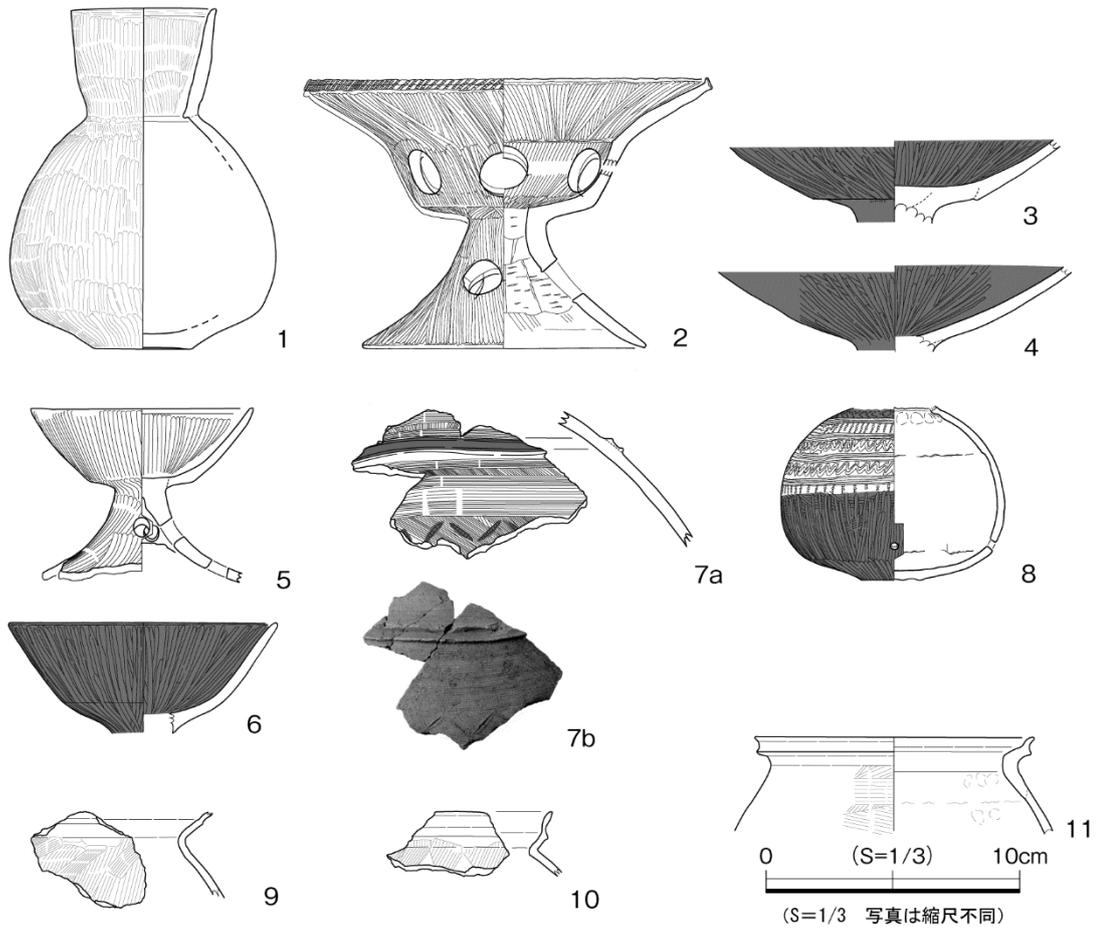


図2 看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点出土の主な外来系土器（報告書より再構成）

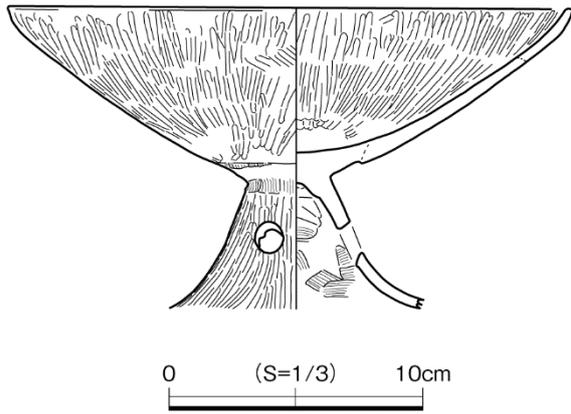


図3 看護職員等宿舍5号棟地点
SI236 出土の高坏

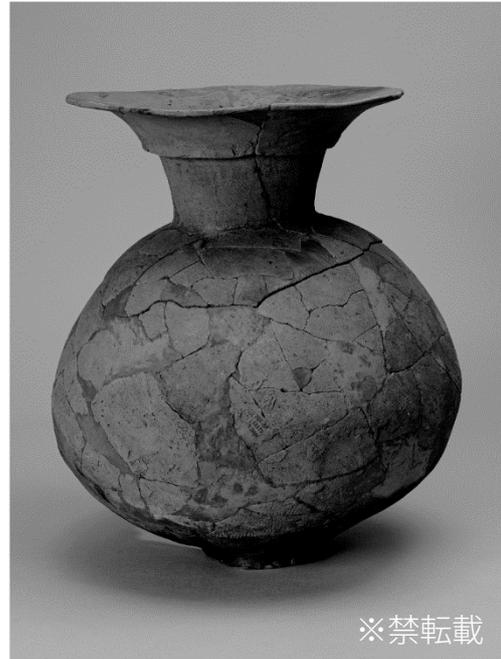


図4 ドナルド・マクドナルドハウス東大地点
出土の二重口縁壺 (右)

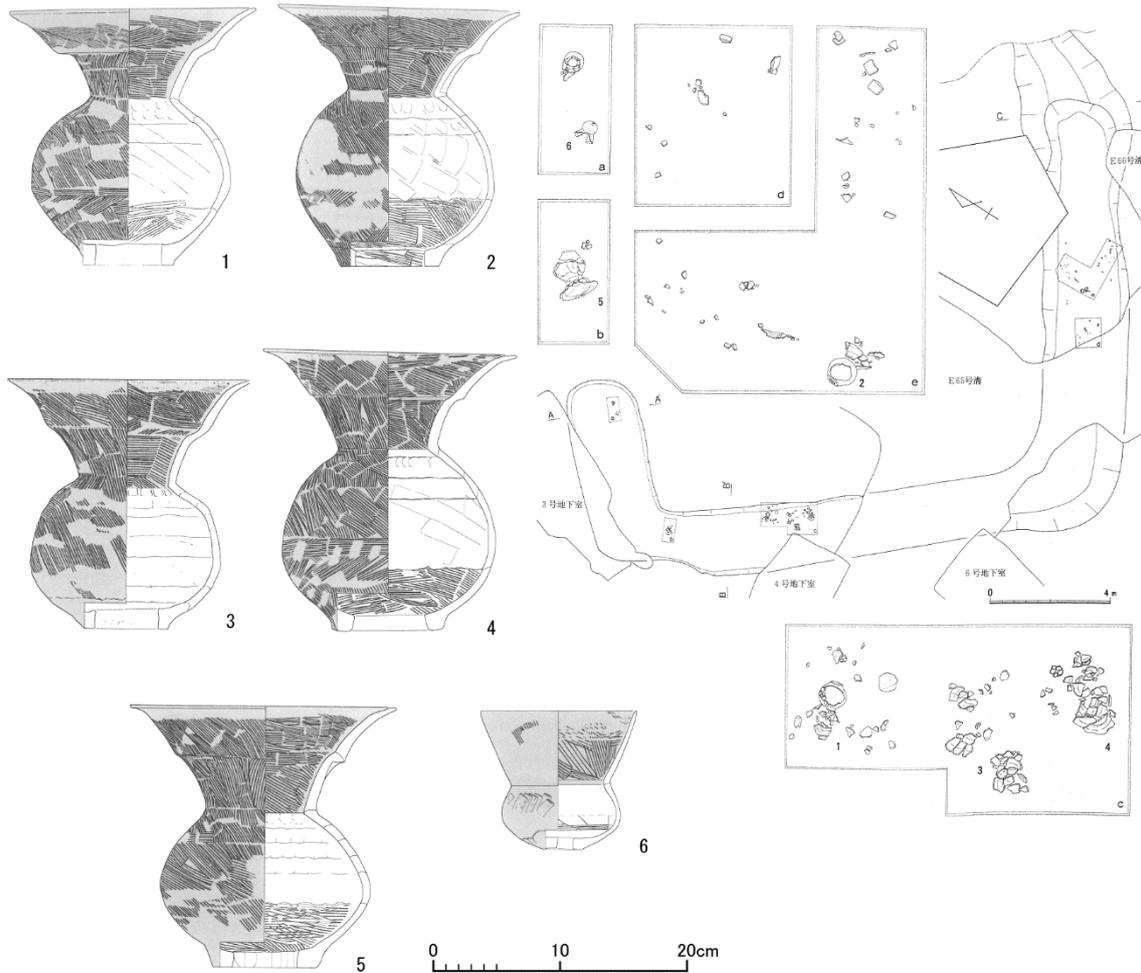


図5 北区赤羽台遺跡3号方形周溝墓 遺物分布図および出土土器 (報告書より再構成)

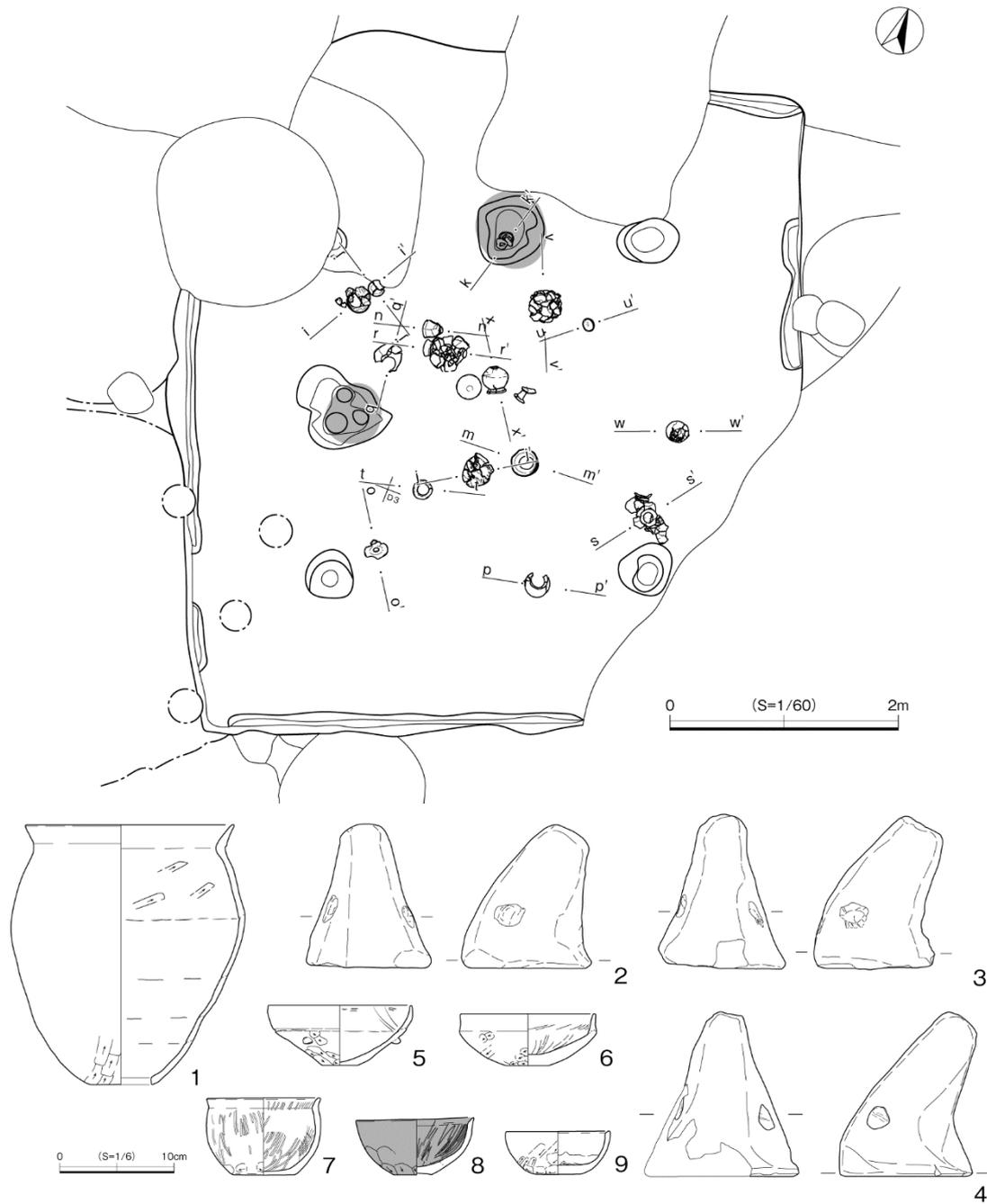


図6 看護職員等宿舎5号棟地点 S1201 遺物分布図および出土遺物（報告書より再構成）

カマドのつくりと使い方

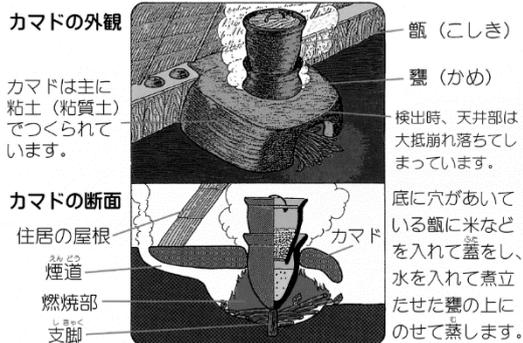


図7 カマドのつくりと使い方
(横浜市歴史博物館 2010)

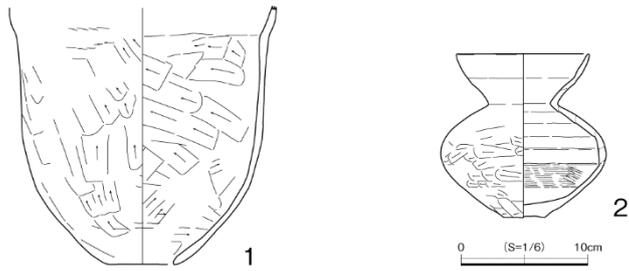


図8 看護職員等宿舎5号棟地点 S1212 出土土器

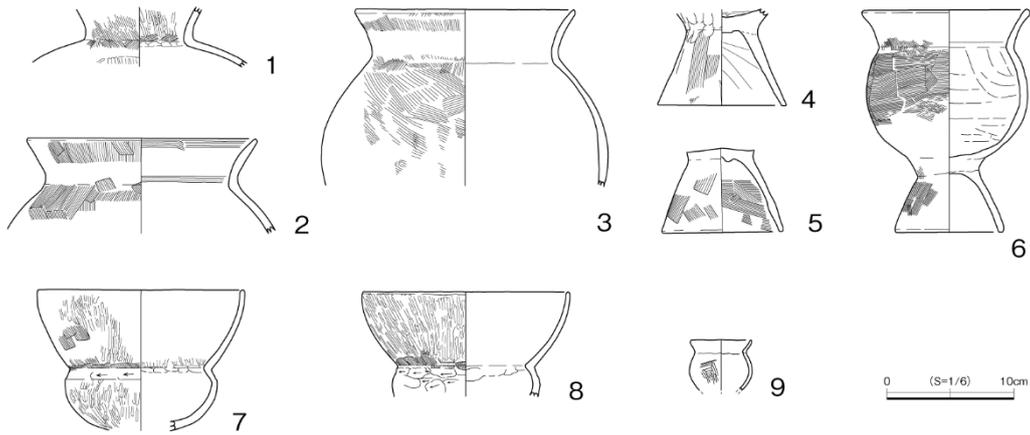


図9 看護職員等宿舎5号棟地点 S1242 出土土器

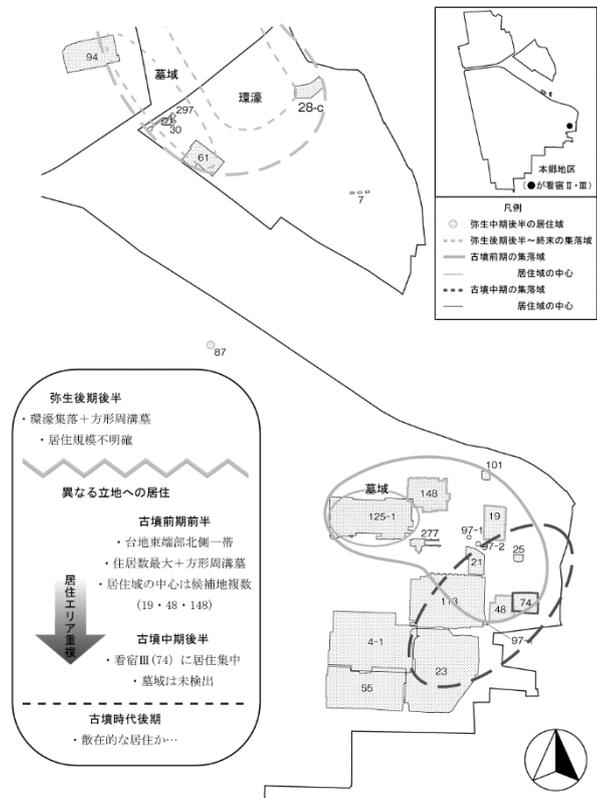


図10 本郷台遺跡群における弥生時代から古墳時代の集落変遷 (山下 2024)